



SAIHIKA 201509

思考が細分化され、嗜好もまた細分化される。

SAIHIKA201509 はあなたの希望になりうるだろうか？

SAIHIKA201509 表紙「絡日」

鴉和

P.1

SAIHIKA201509 目次「嗜好」

矢野ヒカル

P.2

君のいない世界はこんなにも素晴らしい 5

T.K

P.3

『とは言ったものの、どうするべきか非常に悩ましい。警戒を怠っていなければあるいは敵の居場所に当たりをつけることもできただろうが、今朝の出来事のせいで頭がパッパラパーだったので皆目見当もつかない。……』

北の魔法馬鹿共Ⅱ

マウス

P.12

『増築を重ね迷路のように入り組んだ魔法学部棟。地図を見なければまずたどり着けないような一角にクルツニイザレウス教授の部屋が用意されていた。……』

天球少女と生命の樹『三』

矢野ヒカル

P.23

『廻子、退学。長きに渡った私とお兄ちゃんによる学校に行くか行かないかの戦いは、そもそも行く学校が無くなるという形で幕を閉じた。……』

フロムライターズ最低限の光

マウス

P.62

君のいない世界はこんなにも素晴らしい

ＴＫ

前回のあらずじ。何事も無く帰れると思っただら上腕に弓矢が刺さっていた。何を言っているのかわからねえと思うが俺も何が起ったのかわからねえ。こんなことをしたやつを見つけたら、とりあえず両肘と両膝に矢をぶっ刺してやる。

とは言ったものの、どうするべきか非常に悩ましい。警戒を怠っていなければあるいは敵の居場所に当たりをつけることもできたろうが、今朝の出来事のせいで頭がバツバラバーだったので皆目見当もつかない。矢は真後ろから俺の腕を貫通しており、腹をぶっ刺されたときよりはマシだがそれでも痛い。とにかく痛い。もううずくまって泣きたい。ノーリスの胸の中で泣きたい。

痛みで思考が鈍る。もし毒が塗ってあったらどうしようとか、下手な動きをした瞬間にもう一発飛んできて脳天を撃ち抜かれるんじゃないかと、そんな暗い思考がこの状況を打破する気力を削いでいく。

「……………」

鞆がひとりで動いた気がした。だが注視してみても、何の事はない俺の学生鞆だ。明らかに携帯のバイブレーションでもない。

ふと、腕がひんやりしてきた。矢の刺さったところが柔らかく水に包まれているような、そんな感覚だ。同時にいつのまにか矢が抜け、地面からんと落ちた。

そうか、これは……………」

首を振って、考えなおす。矢を放ってきたやつはどこにいる？ 近くか、遠くか、前か、後ろか。ロアで弓矢を操れるのか、透明にはなれるのか。

そんなことはどうでもいい。俺がすぐに使えるロアなんて限られている。とうか昨日の戦いで使った二つしかない。その中で使えるのは、これだ！

瞬きをする。地面はなくなり、俺は落下していた。浮遊感が気持ち悪い。少し上に飛びすぎたかもしれない。

自分の姿を睨みつつ索敵をする手段はこれしか思いつかなかった。真上への瞬間移動だ。下から見上げられればおそらく丸わかりだろうが、先に見つけて突っ込んでやればいいだけの話。それに敵の姿が忽然と消えた時、真っ先に探すのは自分の周りだろう。狩人と獲物の構図が逆転するのが怖いのだ。その隙を狙う。だが空中にいるときに気づかれたときは、俺の負けだろう。

体を地面と水平にして、下に目を凝らした。滞空時間を上げるために、昨日の空中ブーストを使う。あまり長居はできないが。

幸か不幸か、俺が弓矢で射られたあたりには人がいなかった。次に、そこから我が家の方へ視線を移していく。今は、敵が透明化している場合を考えていない。もしそうならこつからブーストと瞬間移動で逃げ帰ります。

そんな心配とは裏腹に、怪しい人物はあっさり見つかった。俺がいた道を真っ直ぐに我が家のほうへ走っていく人影がある。だが……あからさま過ぎるのと、俺の学校の制服を着ているところで今ひとつ確信には至らない。もう少し待ってアパートに入るかどうかを見たいが、これ以上空を飛んでいると全く関係ない他の人に見られて明日のトップニュースになっている可能性が出てくる。

今のところ攻撃はないから、透明になるロアを探してみるか。

俺は本をめくった。

そういえば姫様が目的のロアを素早く見つけるためにこのリスト、エリアルはカテゴリー分けされていると言っていたな……確か、戦闘がアリアルで武闘がガウォリアル、特殊がエフアリアルらしいけど……。

……よくわからない。他のカテゴリーは農業、工業、文化、その他らしいからたぶん特殊のところに入っているだろう。

ページを勢い良くめくっていくと、あっさり見つかった。なるほど確かにこの方が早いかもしれない。だが、重要なのは透明化のロアがあったということだ。これでバレーに覗き放題——もとい、敵が透明化している可能性が高まった。

しかしこれで俺も透明人間だ！

瞬きをして手を見ると、そこにあるはずなのに透けていた。成功した。覗き放題だ。今夜早速、ノリスの風呂に忍び込もう。

「って、うおおおおお!!」

透けた手の向こう側で、黒い屋根が迫っていた。ロアの発動に夢中になっていて、高度を全く気にしていなかった。

咄嗟にブーストを使って浮かび上がる。すると透明になっていたはずの自分の体が見えるようになっていた。ふと、リーリス様なる蝶々が言っていたことを思い出した。

『どんな熟練者でも、吾ですらロアを同時に二種類発動することはできない』  
二つ同時に発動しようとするとうなるのかと思っていたが、先に発動したほうが解除されるらしい。高々には余裕があるのもう一度透明化したいものだが、俺はこれまでに随分とロアを発動している。代償がまだわからない以上、

ロアをやたらと使うべきではないだろう。

先に我が家のまわりを見てみると、例の怪しい人物が丁度アパートを囲む塀の入り口に差し掛かるところだった。危うく見逃してはいけない瞬間を見逃すところだったぜ。

怪しい人物はそのままアパートの中へ駆け込んでいった。これはもしかして大当たりか？ 畏の可能性もあるが、いざとなったら扉へ駆け込めばなんとかなるだろう。

……よし。

俺はアパートの前の道に誰もいないのを確認し、ブーストでブレーキをかけたつ癖の影に降りた。そこからそろりとアパートの中を覗くと、

「つあー！ 漏る漏る!!」

鍵をがちゃがちゃする今朝の隣人（同級生）がいた。足をバタバタさせている。

は？

ついつい癖の影から出て、立ち尽くした。

カチヤン！

「開いた! ……………」

目と目が合った。運命なんてこれっぽっちも感じない。

バタン！

顔を真っ赤にしたその人は自分の部屋に入っていた。そういえば同じ高校だった。今朝の出来事が文字通り過去となり、また新たな伝説が生まれた。悲しみの連鎖とはこのことである。

刹那、視界の右端に奇妙な影が目に入った。咄嗟に後ろへ下がると矢が目の

前をかすめていった。

「うー」

「この道には誰もいなかったはずだ。どこかの角を曲がって来たにしても、ここまで歩くのにかかる時間としては短すぎる。そして、矢を放つのにロアの補助を使って、透明化が解除されたんだ、この子は。」

少女は弓に矢を継ぎ、俺を睨みつけた。目にかかる髪が夕日に照らされて顔に濃い陰影を作っていてちゃんとした表情はわからないが、でもたぶん、この子は俺を睨みつけているだろう。けれど何より驚いたのは、俺と同じ高校の制服を着ていることだった。

背は俺より頭一つは小さく、髪は肩ぐらいの長さで若干茶色みがかかっている。運動はこれっぽっちもできないヤセうだから弓を持っているのだろう。かなり華奢だ。だが弓を引くとこれはもう確実に当たってしまうであろう所が体格に似合わず大きい。弓の弦に弾かれるとすげえ痛いらしいな。胸当てをしてないということはもしかして、「ここを守るためにロアを……？」妄想が膨らむ。

俺と同じ一年だろうが、俺の高校は一体どうなっているのやら。

「あの人を、返してください」

少女は震える声で言った。一瞬、「あの人？」と聞き返そうになったが、昨日のアレで今日のコレだ。この子が言っている人物に心当たりがないわけではない。

「赤い髪のあいつなら生きてるよ」

弓を引き絞る手を下ろす気配はない。

「返してください」

「……君も扉を開いたんならわかってるだろう。全ての国が相互に不可侵だったのに、扉がそれらを繋いでしまった。国の情報を知った者が外に出るのを許

されるはずがない」

「そんなこと、わかっています。それでも……わたしは問います。彼を、返してください」

断つたらわかってるんだろうな、ああん？ という脅きたらう。少なくとも、本人はそのつもりに違いない。だがしかし！ こんなもの俺からすると「どうぞ僕のハートを撃ち抜いてください」とシャツの前を開けさせて片膝を地面につき、両手を羽ばたかせて懇願するくらいには生温い。

この子は厳しい表情を保ったままだが、手まで震えている。

「君にどんな事情があるかわからないが、それはできない」

言うと同時に、ブーストで一気に距離を詰めた。対遠距離武器の基本は距離を詰めることだ、とゲームで学んだ。

彼女は弓の照準を俺に合わせるようにして動かすものの、その動作は間を合わず、俺に弓を弾き飛ばされた。俺は瞬きをしてゼロアスを手に取り、ナイフの形にして彼女の首元にあてがった。非常に気が引けるが、切れないように配慮して刃を首に押し付けた。

「一緒に来てもらおうか」

俺は精一杯、ドスの聞いた声で言った。若干巻き舌気味に、というのがコツ。これで刺青をチラ見せするのがベストだが、生憎とそんなものはない。

「……はい」

少女は諦めたように返事をした。ごめんよ。女の子を怖がらせる趣味はないんだ。あとでアメちゃんあげるから許してくれ。

俺は首にナイフをあてがったまま、くるりと彼女の後ろにまわった。うなじからいい匂いがする。ハアハア。

「歩け」

少女は歩き始めた。あれ？ これもしかして服を脱げって言ったら？ とか考えつつ彼女の首元以外には絶対触れないようにする俺って紳士。ジエントルマン。

扉の前についたので、開ける、と言って開けていただいた。あとで何回謝ればいんだろいな。

さてファンタジー世界に帰って来た、というかまた来たわけだが、どこかここは。行った時と景色が違っていて、どこかの部屋の中になっている。

「どうされましたか！ その腕の怪我は!？」

武装した自警団の人が横から驚きの声を上げた。

「ちょっといるるありまして……とりあえず、扉を閉めてもらっていますか？ それと、自警団の方を二、三人ほどお借りしたいのですが」

「はっ！ 少々お待ちください！ 救護班も連れてきますので！」

自警団の人はさっと扉を閉めると、隣の部屋へ駆けて行き、人を呼んできてくれた。あざっす。

「では傷を治させていただきますね」

自警団の人が右腕の傷に手を当て、離すと傷口は全くわからないほどに治っていた。

「あ、ありがとうございます」

自警団の人はにっこりと笑いかけてくれた。惚れてまうやろ。

「この人を姫様の元まで連れて行かないといけないので、万が一に備えてお三方は付いてきてくださいますか」

「拘束はしないのですか……?」

「必要ありません。見張っておくだけで十分です」

「わ、わかりました」

ナイフ突き付けて攫ってきたやつを拘束もしないなんて、困惑して当然だと思う。けれどこうしなくてはならなかった。きつと、この子とあの赤い髪の野郎は何かある。それはこの小さな戦争で誰も死ななかつたことと関係しているはずだ。

自警団の人三人を伴って、小屋を出た。

「扉をここまで移動してきましたですか？」

歩きながら、疑問に思ったことを自警団の人に聞いた。

「はい。姫様が、有事の際に迎撃しやすいところに移動しておいたほうがいいだろうとおっしゃりまして、ここに運んだ次第です。わたくしどもはてっきり動かせないものかと考えていましたが、あつさり動かせることができました」

「なるほど、そうだったんですね。ここは南東の街、キエルスト」

「はい。城まではジレットをお使いになられますか？」

「姫様と会う前にこの人と話しておきたいので、何か他の移動手段はありますか？」

「そうですね……それなら、馬車でしょうか」

「えっ、馬車なんてあるんですか!」

意外だ。みんなのほほんど歩いているのだと思っていた。意外に文化レベルが高い。失礼だな。言わないでおこう。

「は、はい。ジレットの描き直しをするためによく使われています」

「ではそれで!」

そう。馬車の中ならアレができる。ウハハ。密室だぞ。

それはさておき、自警団の人に案内され、馬車乗り場までやってきた。大きな木の下で馬と馬車が待機している。……馬？

「今朝は馬車が大忙しでしたが、もうみんな城から帰ってきておりますので、幾らでも乗り放題なようです。わたくしが御者をしますので、どうぞ」

馬の顔がすぐく口バに似ているような気がしたが、毛並みと体格はどう考えても馬だ。深く考えないようにしよう。自警団の人二人と謎の少女と一緒に馬車に乗り込んだ。

「では行きます。少し揺れますから、気をつけてください」

馬車がガタゴトと揺れ始めた。

同時に俺は床に手をつき膝をつき、真正面にいる少女に日本伝統のアレ、土下座をした。

「すいませんっしたーっ！」

自警団の人の視線が痛い。俺のハートが撃ち抜かれて折れそうだ。だが密室だぞ。俺の恥は最小限に抑えられた。

顔を上げた。少女は驚きと戸惑いと可笑しさを隠しきれていなかった。そうであったと願いたい。なんか微妙な表情をしていた。さつきは夕日で見えなかったが、この人も姫様に負けず劣らず美人じゃないのか。姫さまは凛とした綺麗な姿があるが、この人はほんわかとした柔らかい可愛さがあるな。こんな人が学校にいたら間違いない俺センサーに引つかかっているはずなのだが。いや別に女の子をじろじろ見るわけじゃないから。俺は姫様一筋だから。ね？

俺は椅子に座り直した。自警団の人、あんま見ないで。照れちゃう。

「ここへ連れてくるために手荒な真似をして済まなかった。名前を聞かせてもらってもいいかな」

今度こそ少女は戸惑いを露わにし、やがて口を開いた。

「築山……ひより」

「ありがとう、築山さん。俺は穂下<sup>ほした</sup>行次<sup>ぎょせき</sup>だ。ただの人攫<sup>ひとさら</sup>いってという印象しか持たれていないと思うが、俺の話を聞いてくれ」

築山さんは否定も肯定もせずに俺の目を見た。

「……まず、強引に連れてきた理由だ。築山さんからどうしても話を聞かなければならないと思ったが、君を説得するもつともらしい言葉が見つからなかった。それに、赤髪のやつとまともに話するには君が必要だと思った。君は知っていると思う。あいつが誰も殺さなかった理由を」

築山さんは目をそらし、無言を貫いた。

「とは言っても君の考えなど聞かないでこちら側の事情で連れてきたことを否定する気はないし、知っていることは全部話してもらってもいい。そうすれば君だけでなく、あいつも解放されるかもしれない。もつと言えば、君たちと協定を結ぶことすら可能かもしれない」

「……随分と都合のいいことを……」

決して口から出任せを言っているわけではない。不審な点は二つある。

一つは、昨日襲撃してきたあいつだ。誰も殺さず、誰も死なせない。さんざん指摘してきたが、不可解極まる。

次に、この子が一人だということ。本気で俺を捕らえるつもりなら、こちらの世界をよく知るこの子に指揮をとらせつつ、何人かで襲えばいい。そうしなかったのはきつと、この子が自分の意志で動いているからだ。

ほぼ間違いないく、この子は赤髪のあいつが属する国の扉を開けた人物だろう。他国を侵略するために少人数とは言え、いきなり兵士を差し向けてくるような

国だ。この子は戦略的に非常に重要なのに、野放しにしておくはずがない。この子は命令に逆らっている。おそろく、あの赤い髪も。」

「この国は女性しかいないんだ。気付いてた？」

築山さんは驚きを隠せない表情で隣に座る自警団の人を見た。それから、馬車の窓から外を覗き込んだ。

「この国は今のままでみんな満足しているんだ。国土なんて広げるところか、余っているくらい。今朝なんて、男の俺見たさに全国民のほとんどが集まるくらいだった」

俺も自警団の人も、表情が緩んだ。築山さんはきよんとしている。

「君の国と比べて、どう？」

すぐに、築山さんの顔に影が落ちた。わかりやすい人だ。

沈黙が馬車の中を支配しかけたとき、揺れが収まった。

「着きました」

自警団の人が馬車の扉を開け、先に降りて手を差し出してくれた。馬車は少し高くなっているので、ノリスにはこうするのだろうか。俺は手を振って丁寧に断りしたが、築山さんはぺこりと頭を下げて手を取っていた。

小さな子がきつちり正装した人にエスコートされていて実に微笑ましい。周りに花が咲く幻覚が見える。ここに百合百合記念碑<sup>キマツタワ</sup>を建てよう。

「姫様は玄関ホールにいらっしやるようです。行きましょ」

御者をしてくれた人が一足先にメイドさんに聞いてきてくれたらしい。俺は返事をして、築山さんと共に自警団の人について行った。と言っても馬車が着いたところは城の入り口の門のすぐ前だったので玄関ホールは目と鼻の先である。

門をくぐって城の中に入ると、広間が様変わりしていた。落ち着いた雰囲気だったのが、玉座くらい明るくなっていて、水路が増設されている。中央の吹き抜けからは水が小さな滝となって落ちているし、なんだこれ。何が起きた。中央の滝の横ではノリスと何人かのメイドさんが話をしている。もしかして、傷の修復がてら模様替えをしたのか……？ 姫様恐るべし。

五人でぞろぞろと入ってきたのもあって、ノリスはすぐにこちらに気付いた。メイドさんたちに断りを入れて、こちらへ走ってくる。うむ、水色のワンピースと蒼い髪を風に戦<sup>たたか</sup>がせる女の子というものは格別であるな。今度、晴れた朝に草原でやつてもらおうで候。

「どうされましたか？ そちらの方は……初めまして！ 私はこの国の姫、ノリス・レクエンスです。よろしくお願ひしますね！」

「っ、築山ひよりです……」

すげえノリス。効果は抜群だ。元氣な挨拶とは反対に、お淑やかな悪手が築山さんを大いにたじろがせている……！

「それで、ええと。ひより様は行次が招待してくださったお客様ということでいいのでしょうか」

ノリスは築山さんからすつと手を離し、にっこり笑顔のまま頭の上にクエスチョンマークを浮かべて聞いた。

「あー、それなんだが……」

これまでにあったことを、かくかくしかじか四角いムーブ。コンテ新登場。燃費の良さで文字数を使わず、地の文に優しい。

「というわけなんだけど、ノリスに助けられたよ」

「鞆の中に仕込ませてもらったジェットですね。もしものときのために用意し



ておいたのですが、大事に至らなくて良かったです。傷の方は大丈夫なのでしようか……」

「ああ。自警団の人が治してくれたんで大丈夫。で、提案なんだが、俺、ノリス、築山さん、赤髪の奴の四人で話し合わないか？」

「いいですね。私は賛成です。ひより様はどうですか？」

ノリスにじつと見つめられて、築山さんは考えこんだ。

「……わたしは……あの人と会って、二人きりで、話したい」

睨みつけるわけでもなく、見入るわけでもなく、ただ強く、築山さんはノリスの目を見ていた。

しばらく誰も何も言わず、広間は静寂に包まれて水の音以外聞こえなくなつた。やがて、

「行次はどう思いますか」

私は答えが決まりました。俺にはそう言っているように聞こえた。

「そうだな。問題がないわけではないが、構わないと思つ」

「私と同じ答えですね」

ノリスは安心したような表情を見せた。

「ですが、二つ条件があります。一つは、赤い髪の方の拘束は解きません。申し訳ありませんが、牢で話していただくことになります」

「それから二つ目は、監視をつけることだ」

ノリスは感心したようにこちらを見上げた。俺はドヤ顔を返してやるうかとも思ったがキモいので真顔で話し続けた。

「監視は自警団の人を何人か。築山さんが赤い髪の奴を逃がそうとしたら捕らえてもらう。きっと俺たちに聞かれてはまずい会話なんだと思つから、ロアか

そつちの国の言葉で会話してくれ」

「そのくらいは、当然だと思う。許してもらえるだけでも、ありがたい……」

築山さんはべこりと頭を下げた。

できれば二人別々に話を聞くべきだろう。口裏でも合わされて、嘘の情報を掴まされると最悪、また戦争をふっかけられて今度は敗北するだろう。だがそうしないのは、俺もノリスも同じようなことを考えているからだ。心配はない。

「それでは、今すぐに牢へ向かいますか？ 先に新しくできた部屋でお茶をするという手もありますが……！」

ノリスが目を輝かせた。ああ。異世界でもやっぱり女の子なんだな。異世界の女の子と一緒に自分が作った部屋で茶を飲むなんてすごく有意義。ガールズトークに花咲きそう。そうなつたら俺は空気を読んで現実世界に戻つて自室に閉じこもるべき。悲しい世界。

「時間が惜しいから、今から夜まで話そうと思つ」

「どうですか……」

友達になれそうな女の子にフラしてしまい、ノリスはしょんぼりした。あとで俺がお茶してあげるから元氣出してというかティータイムと一緒にさせてくださいお願いします。

「でも、仕方ないですね。また今度にしましょう。牢まで行きますので付いてきてください。自警団の方は扉のほうに戻っていたら構いません。牢の見張りには城の自警団のほうから増員してもらいます」

「承りました！」

自警団の人三人は声を揃えてそう言うと、すたこらと城から出て行き、再び

馬車に乗って持ち場に戻っていった。

「では、行きましようか」

ノーリスは広間の奥のほうへ歩いて行く。途中、広間の内装の仕上げをしているメイドさんに自警団の人を数人呼んでくるように頼んでいた。

広間の入り口からでは見えない、階段の下の奥まったところに重たそうな扉があった。

「牢は一応備えてありましたが、ほとんど使ったことがないのでこんな辺鄙なところにあるんです」

ノーリスは恥ずかしそうに誰に向かってか言い訳をしていた。一体どれだけ内装にこだわっているのか。趣味なのだろうか。お茶したときに聞いてみよう。

内開きの扉をギギギと開けると、ぼんやりと照らされる地下へ続く階段が見えた。

「階段が少し急なので気を付けてください」

「誰か降ってきてもいいように俺が先に行くよ」

ノーリスはふふふと笑った。反面築山さんはノーリアクションだ。まさか俺の真意が読み取られたのだろうか。女の子二人に上から覆いかぶさられるという最高のシチュエーションを目指す俺の計画が。

冗談はさておき、いやもちろん冗談ではないが話が進まなくなるのでさておき、俺、築山さん、ノーリスの順番で階段を降り始めた。急な階段をずんずんと下って行くと、やがて少し広めの通路に着いた。

「こちらです」

ノーリスが示した先にあった牢は階段のすぐ横にあり、強固な鉄格子が降ろされていて、中には手錠と足枷をなれ、目、鼻、口、耳に拘束具を付けられ、

全身を包帯のような布で巻かれた男がいた。

「外せるのは耳の拘束だけです。どうかご了承を」

「……はい」

築山さんは沈痛な面持ちで頷いた。俺もびっくりだよ。ここまでする必要が果たしてあるのか？

ノーリスは看守さんから鍵を二つ受け取ると、片方で鉄格子の扉を開けて中に入り、片方で赤い髪の男の耳を塞いでいるゴツい耳当てのようなものを外した。その後、再び鉄格子を閉め、鍵を看守さんに返した。

「では、すみませんがこれで」

「……ありがとうございます」

そこへ、ノーリスが手配しておいた自警団の人が四人、階段を降りてきた。

「そうだ、危うく忘れるところでした。話が済みましたらこの方たちに声をかけてください。夕食と寢室を用意しておきますので、そこへ案内してください。もしよろしければ晩ごはん、一緒にしましょうね。では」

ノーリスは柔らかに笑って軽く手を振った。築山さんはお辞儀をすると、照れくさそうに手を振り返した。俺って一体。

階段を上がって行く途中、ノーリスが立ち止まってこちらを振り返った。

「あの……晩ごはんまで時間がありますし、その……お茶を飲みながらお話しませんか……？」

「喜んでー」

「こは悩むふりをすべきたったのかもしれない。だがそんなことをしている余裕は俺にはない。今にも阿波踊りを踊り出しそうな両手両足を抑え、二つ返事をした。

○あとがき

前回、「次回はドバーツと進む」と言ったな。アレは嘘だ。

最近というか今作は書いても書いても進みません。

なぜか？

主人公の思考を事細かに地の文に書いているのと、状況描写として書かなければならないことがだんだんとわかってきたからです。

それ自体はいいことではあるのですが、はじめてのしょうせつである「未來を変え隊活動日誌」は文字数に対するストーリー展開がずいぶん早かったので、これだけ書いても進まないと悲しくなってくるものです。むしろこれで正常なんでしょうか。どちらにせよ蛇足は取り除かなければなりませんね。

それではいつもの設定資料と参りませう。

・透明化のロア

本当に透明化します。身に着けている衣服も、荷物も、影すらも透明化します。そういう意味では透明化ではなく、認識されないと云ったほうが正しいでしょうね。

さらに、透明化の範囲は自分だけに留まらず、目に見えるものなら特に制限なく透明化ができます。ただし、透明化するものの多さに対してそれ相応の代償が支払われることになり、透明化が解除されれば、また透明化するのに代償がいります。透明化している時間はあんまり代償に影響してきません。そりゃあ、一ヶ月とか透明化してるとさすがにやばいですけど短時間なら問題ありません。

ただし、見えないというだけで当たり判定はもちろんのこと残っています。地面を歩けば音も鳴りますし、煙に巻かれてしまえば、体のシルエットが出て

よく見えると思います。あくまでも光学迷彩です。熱源感知型の暗視スコープ(RNV)をつけられても見えます。一応言っておくと、そんな敵と戦う展開はないです。

・治療のロア

姫様が主人公の鞆の中にこっそり描いてあったジレットが自動発動したものの鞆の持ち主に危険が迫ったため、傷を治しにかりました。そのため、まず矢が抜けましたが、姫様の位置が世界を隔ててしまっているのと、ジレットを描くのにあまり時間がかけられなかったため血は止まったが完治には至りませんでした。

これのおかげで主人公がファンタジー世界に戻ったあと、自警団の人に治療してもらった際にとて早く治りました。姫様まじ天使。主人公が「矢の刺さったところが柔らかく水に包まれているような、そんな感覚だ。」と表現したのは姫様に水の適性があるから。これは追々でてきます。

ちなみに自警団の人が使ったのもこの治療のロア。応急処置のために自警団の人は全員扱えます。が、怪我がひどいと治した人のほうが代償をめちゃくちゃに払ってしまい、動けなくなったりします。代償の大きさがピンからキリまでのロア。そのため、救護所や病院にはベッドにジレットが描いてあり、基本的にそれを使って治療をしています。

以上です。設定だけであと数万文字はラクシヨーに語れます。しかもそつちのほうを書いていくスピードはやたら早いです。悲しい世界。

今回もこんなところまで読んでいただいた方はどうもありがとうございます。ではまた次回。アリーヴェエでち！

北の魔法馬鹿共

〜リフロンティアと矢印大陸の動乱

マウス

前回のあらすじ

北大陸アールズの魔法学校の受験会場でヒメリは謎の少年と出会う。少年の助言で無事合格したヒメリだったが、その場で意識を失い彼について何も知ることが出来なかった。

そして一月後の入学式、ヒメリが目にしたのは、学生でもあり教授でもあるという異質な肩書きをもつリンユ・クルツⅡイザレウス。あの日の少年だった。

増築を重ね迷路のように入り組んだ魔法学部棟。地図を見なければまずたどり着けないような一角にクルツⅡイザレウス教授の部屋が用意されていた。

「全くなんなんだ。僕は仲間とは言ったが、決して王様にしてくれ、などとは頼んでいないぞ」

部屋の床には高級絨毯が敷かれ、そなえられた家具もまた一見して高価だと分かる代物ばかりだ。

「向こうでも凄かったです、イザレウスの名を継ぐ者っていうのはいつも注目の的なんです」

椅子に背を預け溜め息を吐くリンユに、常に彼に同行する少女、ヒルデが宥めるように答えた。

「別に魔法について教えを請われたり、意見を求められるのはいい。喜んで答えるさ。ただ、サインくれたの知り合いを紹介してくれただの、そういうのは違うだろう」

授業初日、リンユが教室に訪れると、瞬間に同級生に囲まれ、矢

継ぎ早に質問攻めされた。講師が講義室に入ってきても収まる様子がなく、授業の半分は彼にとつて不毛な時間として消費されたのだ。

授業が終わった直後に講義室を出るも、今度は上級生に取り囲まれ、結局次の授業の遅刻ギリギリまで彼が解放されることはなかった。

「まあ、向こうには有名な魔導師家系の子息は多くいたからな。取り立てて騒がれるっていうことも少なかったが……」

「こちらはそういう人、少ないですかね」。地位がある人の多くは、魔法使いより商人とかの方が多いいみたいです」

再びリンユがため息を吐く。

「まあ、しばらくすれば皆慣れるだろう。それまでは、我慢するほかあるまい。……それにしても」

リンユは一人の少女と、彼女が持つ碧い杖に思いを馳せる。

「あれは間違いなくあの人の、イスカのものだった」

一月前、リンユが受験の折に見かけた赤頭巾の少女は、彼のよく知る人物の杖を持っていた。

「紛失されたということになりましたが……。三ヶ月前、イスカさんはアールズにお忍びで訪れていましたから、その時に所有者が移ったんじゃないかと」

「まあ、そうなるな。その直前まで持っていたのは間違いなかったから」

「魔法使いが自分の杖を手放すなんて、そうそうある事じゃないですよ。やつぱり、あの子はイスカさんの事故と何か関係が……」

「まだ可能性に過ぎん。憶測でものを語るは、魔法使いの恥だと、いつも——」

「別にあの子がイスカさんに何かした、なんて言っていないじゃないですか！ いちいち喧しいですリンユは」

「ぐ、ぐぬぬ……。まあいい、あいつの身辺については適当な奴に調べさせている。それで駄目なら、直接聞くしかあるまい。素直に答え

るかは分からんがな」

リンユは席を立ち、部屋から出ようとした。

「戸締りは任せただ。俺は実験室に――」

「待って下さい。私も行きますから」

「はあ？ ただの邪魔になるだろうが。大人しく家に帰れ」

「嫌ですー！ いつとも深夜に帰ってきて晚饭も食わずに寝て。体調しても知りませんからね！」

「そんなものは僕の勝手だろう。第一それで健康なんだから問題ない」

「ありますよ！ 折角作ったご飯が冷めていくのを見る気持ちが分かりますか？ すごく悲しいんですよ」

「次の日に弁当に詰めているだろう。何も捨てているわけじゃない。

見るのが嫌ならお前が食べれば……ん？」

「私はリンユの為に作っているんですよ！ もういいですから。今日は私も実験室に籠りますんで！」

リンユは今日最も大きな溜め息を吐くと、やれやれと首を振って諦めの様子を見せた。

「……絶対に邪魔はするなよ。こっちで暇つぶしに研究を始めた古代魔法だが、いよいよ再現が出来そうなんだ」

「はい！ はいはい！ って置いてかないで下さい！ 迷ったらどうするんですかー」

目を輝かせるヒルデを尻目に、リンユは薄く笑い早足で廊下を歩いて行った。

錠が開いたままの教授室に、その日二人が戻ってくることはなかった。



「こんにちは、クルツ教授」

「今は一学生の身分です。名も知らぬ先輩殿」

昨日とは打って変わり、席に着いたリンユに近づいたのは二人だけだった。

一人はリンユに話しかけた女生徒。特殊な魔法衣である服をまとっている。もう一人は女生徒よりかなり身長が離れたオーク。彼女の斜め後ろで静かに見守っている様子だった。

「ではクルツ君、率直に尋ねたいことがある。君、私の可愛い後輩にちよっかいを出そうとしているだろう」

彼女の語気は荒く、怒りが節々から感じ取れた。同年代の少年少女達からは感じ得ない強い威圧感だ。彼女が待機していたなら、リンユの同級生たちが近付いて来ないのも頷ける話であった。

「はて、なんのことやら僕にはさっぱり」

「とぼけるんじゃない！ 君が雇った密偵に吐かせたんだ。君に、そこにいるサヤさんを調べるように頼まれたってね！」

彼女が指を指し叫ぶと、ガタガタと木の机同士がぶつかるような音がした。

「うえ、え？ 私？」

当の本人も自覚がなかったようだが、リンユと女学生の二人は無視して話を続けた。

「……なるほど。ククク、彼を捕えるとはやりませぬ、先輩殿」

「私はガレット・ベアトリクスだ。入学式でも紹介されたはずだがな。とにかく、この件について納得のいく説明を求めろ」

二人の険悪の雰囲気、リンユの隣にいたヒルデは何もできずにオドオドするばかりだ。

「そうですね……。僕は彼女の才能に可能性を感じたのです。未来ある若者には可能性を与えよ。僕の母の言葉だ」

「イスカ・クルツⅡイザレウス……。稀代の天才大魔導士か」

「その呼び方を、あの人は嫌っていましたがね」

「で、君はサヤさんの可能性を知って調べたようにしたと？ いまいち腑に落ちないな」

「事実僕は彼女の受験の手助けをした。勿論ルールの範囲内ですがね。合格したのは紛れもなく彼女自身の実力だ」

「そうだとしたら、こそこそ調べる必要はないだろう。本人に直接――」

そこで、リンユが手を頭に寄せ、笑って見せた。

「いやー自分人見知りなもんで。ほら、人に囲まれるとロクに受け答えも出来ませんで。アツハツハ」

最初にチラリと見せた鋭さをおくびにも出さない様子で、彼は真実しか語らない。これ以上の追及をし辛い空気がなっていた。

「ああ、それはそうと――」

ガレットの背筋に冷たいものが走る。眼前にいるリンユは立ち上がると、彼女の耳元で囁いた。

「そちらが放った密偵も、今頃僕の部屋で眠っているかと思えますよ？ 早く迎えに行つた方がいい」

「なっ……！」

「そろそろ講義が始まります。先輩も自分の教室に戻つた方がいい。

……それと皆さん、お騒がせしてすみません」

リンユは立ち上がると、教室全体に向かって頭を下げた。

「学園の凄い人らがヒメリを狙っているのかにや……？ やつぱりヒメリは凄いいんだにやー！ ミーの目に狂いはにやかつたつてことにや」

「あ、あはは……えっと、何だろう。困つたなあ」

リンユがガレットに目を配ると、彼女は後ろ手を振って帰って行った。また来る、という合図だろう。

「……めんね。ベアトは気に入つた子の話になるとすぐ頭に血が昇るから。いつもはもう少し大らかな人なんだけどね」

「お気になさらずとも、先輩のことを嫌つたりなどしませんよ。怪し

いと思われたのも無理はない。先輩もサヤさんを気に入っていたというなら尚更だ」

ガレットの隣にいたオークは、謝罪と彼女のフォローをすると駆け足で彼女の後を追つていった。

「じーっ」

その直後、授業中にも関わらずヒルデは何かを訴えかけるようにリンユに視線を送つていた。すぐ隣に座りながらだ。

「あの二人はデキているのだろうか？ いつも一緒にいるにや」

「ど、どうだろう……」

聞き覚えのある声があったが、リンユは聞かなかつたことにした。

『何か言いたいことがあるのか？』

板書をとる振りをしながら紙に鉛筆で文字を書く。鉛筆とは、炭の仲間を木で挟んだ筆記具である。紙に先端を滑らせることで、摩擦で文字が残る。

『何であんな嘘吐いたんですか？』

『あの女は只者じゃない。あまり手の内を見られたくない』

『でも、ヒメリさんとは仲良いみたいですよ』

『そのようだな。かなり面』

「クルツ君。今板書をとるようなことは何もないはずですが？ まあ、あなたにこんな内容を教えるのも無駄かもしれませんが……」

「いえない。理論一筋だった身ですから、実践科で学ぶことは、僕にとつて益あることです」

「そうですか……じゃあ丁度いい。今からファイアーボールの実技をするので、見本をお願いします」

「はい、分かりまし――」

「ああ、杖は学園のものを使用しますので、自分の分は置いて来てください」

「……え？」

リンユが、愛用の杖を片手に席を立とうとすると、講師が制止した。

「あー、えー……。これを使えばいいんですね？」

「はい、私に向かっただけでお願いします。あ、名乗りからで」

リンユの顔を冷汗が伝う。助けを求めようとしてヒルデの方を見やると、彼女もまたあわあわと両手を振っていた。

しばらく彼が固まっていると、講義室の中がざわめき始める。

「どうしましたか？ 早くお願いします」

「は、はい」

リンユが横を見ると、怪訝な表情を浮かべる生徒たちの中で、ヒメリと目が合った。

彼女の目は輝いていた。それはさも、「今から凄い魔法使いの魔法が見られるんだ！」と言わんばかりだ。

リンユが腹を決めた。深く息を吸う。

「背筋を伸ばす。杖は右手に。片足を半歩前へ。目標を視界の中心に。左手は杖の先に添えて。もう一度、深呼吸。大丈夫、出来る、出来る」

誰にも聞こえないような小さな声で己を鼓舞した後、カッと目を見開き力強く叫んだ。

「リンユ・クルツィザレウスの名において命じる！ 火球、よ……？ や、やった……ぐふはっ！」

リンユの杖の先端付近から、火花のような明かりが一瞬現れた、というところで、彼は突然叫んだかと思うと、意識を失いそのまま前に倒れ全身を床に打ち付けた。

「だ、大丈夫ですかリンユ！ ああ、鼻血流しています！ メディック！ メディック！」

「誰か、彼を保健室へ」

真っ先に飛んできたのはヒルデだった。まるでこうなることを予想していたような早さでリンユの元へ駆け寄った。隣では講師が指示を

出している。

「私と、あと一人誰か！ よし、ヒメリさんで」

「うええ！？」

ヒルデがヒメリを名指して呼んだ。

「早く！ 人命に関わりますよ！ さあ、カモン！」

「はいっ！」

「じゃあミーも応援に……」

焦って駆けるヒメリと、その後ろを必要ないミーシャが追う。

講師がリンユの様子を見て呟いた。

「これは一体どうしたことでしょう。この症状はまるで魔力欠乏症……」

「はい、そうですよ」

「え？」

「リンユは今の魔法で体内の魔力が枯渇したんです。あ、因みに消耗していたとかではなく、あれで全部です。火花を出す程度が今の彼の限界」

「それじゃあ彼は……」

「自分の力じゃまともに魔法は使えません。……では、せーので持ち上げますよ」

「は、はい……せーのっ！」

「フレイフレイにヤーにヤー」

四人が講義室からいなくなると、静けさが室内を覆っていた。誰も何か言いたげに、しかし何も言えない状況だった。

「えー、授業を再開します。見本を他に誰か……」



同時刻、魔法学部棟の一室で四人の生徒が会議を開いていた。

「第二回、クルツ一年をギャフンと言わせる会ー！」

「第一回はクルツ君を仲間に引き入れる会だったよね？ 名前変わるの早くない？」

一人立ち上がって叫んだのはガレットだ。鼻息荒く拳を突き上げる。

「すいやせん。俺がまんまと罠に引っ掛かったばかりに……」

つい先ほど、リンユの教室で目を覚ました男、ヒガンである。

「そう気にするなよタチバナ君。まあ確かに、あれで彼の警戒心が強くなったのは確かだけだよ」

「うおおお！ 申し訳ないッス。この度の不祥事は俺の命で——」

「止めて、ホント止めて。君はそのすぐハラキリしようとする癖を治してくれないか」

ノブナガは荒れる二人を必死で宥めていた。

「今回はヒガンを斥候に出すという無茶をした私の落ち度だ……！ スキルアップのつもりだったが、そのような軽い気持ちで挑んでいい相手ではなかったのだよ」

ガレットが悲壮な顔に悔しさを滲ませる。

「うん、間違いなくあざみちゃんが適任だったよね。いや、忍者を差し置いて熱血を送り出したときは、正直君の頭を疑ったよ」

「なら何故言わなかったんだー！」

「いや、君と同じさ。僕も心のどこかで彼を、イザレウスを侮っていたのかもしれない」

会議室が一時静寂に包まれる。

「なら、次は私が行くぞ！ 適任なんだろう？」

それまで黙っていた……のではなく、おやつのかき氷に夢中だった少女、あざみちゃんが手を挙げた。

「駄目よあざみちゃん！ あざみちゃんが危険な目に遭うなんて考えたくもない！」

「それ、タチバナ君だったら大丈夫みたいに聞こえるんだけど」

「実際大丈夫だろ。ヒガンは無駄に頑丈だからな」

「お褒めの言葉っ！ 嬉しいッス！」

「いや、今の褒めてないでしょう。……全く、喧しいっつら」

「私は楽しいぞ！」

「あざみちゃんもいるのは久しぶりだね。どうだった、一年振りの故郷は」

「寅はあまり遊んでくれないし、シシトラはいないし、少し退屈だったぞ」

「一国の王を遊び相手にするって、あざみちゃんも中々すごいねえ」

「コノハにも言われたぞ！ あざみはお姫様みたいなもんだって！」

「そりゃあすごい……僕はコノハさんを存じ上げないが」

「今年の桜花祭は去年より更に凄かった！ 隣の国のお姫様とも回った！」

「私はあざみちゃんに会えなくてさびじがっただよー！」

ガレットがあざみに抱き付いて頬ずりをしていた。高身長のカレットが傍だと、あざみはまるで人形のようにだ。

「や、やへっ！ 苦しいぞベアっ！」

「ああ可愛いなあもう。もふもふ！ もふもふ！」

「ごめんよあざみちゃん。こうなったベアトは誰にも止められない」

「そ、そんなあ……！」

「さて、真面目に話そうか」

「まるで賢者モ……なんでもないッス」

しばらくして、ガレットが話を戻した。ひとしきり満足した後、強い意志と深い知を感じさせる彼女の表情は、先ほどまでの欲に突き動かされていた彼女とは別人であるような気さえしてくる。

「我々はまず彼についてよく知るべきだ」

「イザレウスと言えば、魔道の歴史に燦然と輝く名だね。初代、アン



サー・イザレウスは今ある全ての魔法の基礎を作った伝説の人だ。魔法使いを志す者で、知らない人はいないだろう」

「そうだ。以後も今に至るまで、魔法に関わる様々な発明、発見の多くを一族は成し遂げてきた。彼らが持つ魔道特許の数は、二千を超えるそうだ」

「に、二千ツスカ……想像も出来ないや」

「初代の宣名式契約法に始まり、魔道式の分解に使うサイ定理はサイモン・イザレウスの発見だよ。あと魔力循環を良くするイザレウス呼吸法は、クレバーウッド・イザレウスが提唱したんだっけ」

「よく分からないが、すごいのか？」

「ああ。その名の前ではベアトリクスの家名など塵同然………自分で言ったが傷つくな」

「なら比較を止めなよ。と、まあこの辺は大昔の話で実感湧かないかもだから、先に進もうか」

「項垂れるガレットから説明を引き継ぎ、ノブナガが続けた。」

「イスカ・ベアトリクス、は知っているかな？」

「俺知ってます！ 大天魔導士に最年少で選ばれた魔法使い。くーつ、カッコいいツス！」

「ああ、彼女は三十三という若さで異例の出世を遂げた。南で最高の魔導士に与えられる称号は、そのまま大陸最高の魔法使いを指すものと考えていいだろうね」

「つまり、世界最強と言っわけだ」

「最高と最強は違うけどね」

「……ぐすん。ガレットお家帰る」

「さっきまでの威勢はどうしたのさ。……リンユ君はそのイスカさんの息子だ。因みにクルツ、というのにはイスカさんの結婚相手の家名だ。それで、本来嫁入りでイスカ・クルツとなるところを、論文などの研究実績を残す上で不便だから、元の名を残してクルツIIイザレウスと

したんだ」

「んん？ なあノブナガ」

「何だいベアト」

と、そこまで聞いて、ガレットが手を挙げて質問した。

「それって便宜上名を残しただけで、イスカさんはイザレウス家の人間じゃなくなつたんだよね？」

「結婚した時点で、そうだろうね」

「じゃあ、何で息子のリンユまでイザレウスの名が残っているんだ？ 彼はリンユ・クルツ、でいいだろう」

「確かにそうだね。そこは僕にも分からない。大きな家だろうから、家庭事情も複雑なのかもしれない」

四人それぞれが思い思いの家庭の事情とやらを考える。

「……大変そうツスね」

「よく分からんぞ」

「家庭の情事……ぐふふ」

「そこ、口を慎みなさい。つたく、君が一番理解に近い環境にいると思うのだけどねえ」

能天気なガレットにノブナガが溜め息を吐いた。

「イスカさんはね、この前の白冬の月、ほんの二か月前に亡くなつたんだ」

「葬式だつて、教授達の多くが学園からいなくなりましたね。あの時は休講だつて喜びましたが、残された息子さんを思うと……うおおお！ 俺はなんて罰当たりな男なんだああああ！」

「それから一月もしない内に彼はアールズに來たのか。……早すぎないか？」

「その辺も僕には分からないけどさ。とにかく、イスカさんは、その研究成果で莫大な額のお金を稼いでいた。というより、勝手に生まれたとする方がいいかも。彼女自身は研究一筋でそういうのは興味がないか？」

「人だつたつて聞くから」

「それつてつまり……?」

「リンユ君はその遺産を受け継いでいるんじゃないかな」

「額にして如何ほど?」

「第三者の勝手な見立てだけど、十億エンは下らないとか」

「……よし。第三回、クルツ君を仲間に取り入れる会始めるよ」

「冗談じゃなく、僕もそうした方がいいと思うよ。知力、魔力、財力。」

彼はあの若さで全てを手に行っている。ただの子どもが集まって、どうにかなる相手じゃない」

「いやいや、只のボンボンかもしれないだろ? 甘やかされて育ったさあ」

「君はさっきの彼とのやり取り、忘れたのかい? こてんぱんにされたじゃないか」

「うぐぐ」

「彼は魔道博士号を取得している。それも南で最高の魔法学校のものだ。教授の肩書は決して飾りなんかじゃない」

「でも知力があるのは分かったが、魔力は、魔力は少ないかも!」

「体内の魔力貯蔵量は遺伝する。君がそうであるように、優れた魔導師の家系に生まれた者は、親と同じか、それ以上の魔力を宿して生まれてくるんだ。クルツ家と言うのがどういいう家系かは知らないが、恐らく魔道の名門だろう。イスカ君が生まれ持つて与えられた器がどれ程のものか、想像もつかないね」

「そうだ、とノブナガが思い出したように語る。

「少し前、彼の通っていた学校である学生がすごい魔法を唱えたんだよ。どんな魔法だと思っ?」

「そのある学生つていうのはリンユ君ツスか?」

「ああ、恐らくね。その学校の主席の話らしいから」

「んー。広範囲を燃やしたとか」

「それぐらいなら君にも出来るでしょう。もつと恐ろしいね」

「嵐を起こした、とかどうツスかね?」

「天変地異か。近いね」

「じゃあ地震だな!」

「あざみちゃん惜しい! それより派手だ」

「地震より派手……? そんなもの他に——」

「金夏の月、空にあるものと言えば?」

「空? 金夏だと星屑祭りで………まさか」

「そのまさかさ。その学生が手に持つ杖をひとたび振ると、空から隕石がズドンと、落ちてきたそうなの」

ノブナガの言葉に、皆が黙っていた。住む世界が違うとはまさにこのことだ。

「とまあ、クイズはこの辺にしておいて。いつカチコミに行こうか?」

「ごめんなさい。私が悪かったです。私、リンユ君とはよい関係を築いていきたいと思ひます。いや、マジで」

「じゃあ、そこら辺の話から始めて行こうか」

「ノブナガ様の話術には、目を瞠るものがありますね」

「そうかな、ありがとうサランさん」



リンユの四方を火が取り囲んでいた。景色が歪むほど熱せられた室内の中で、しかしリンユは冷めた目をしている。

ガラスが融け、薬品があちこちに散乱している。金属製の棚は爆発の衝撃で吹き飛ばされ、逃げ道を塞ぐように横たわっていた。

リンユの耳に次なる爆発音が響く。今すぐ逃げなければ命を落とす危険すらあった。それが、現実であったとしたら。

「ここは、夢の中だ」

事実を強く意識することで、思考がまとまりをもって動き出す。

爆発音は彼の視線の先、第七実験室の奥から聞こえてきた。それと共に、誰かの話す声も。

「教えてくれ、そこに誰がいたんだ」

誰に向けてでもなくリンユが呟く。救いを乞うような、弱々しい声音だった。

「分かっているんだ。これは僕の夢の中で、僕が知ること以上の情報がある。ここにはないのだと。何度も、試したからな」

ゆっくりと体が声のする方へと向かっていく。頭の中の彼がどんなに急かしても、その体が走り出すことはない。今思考している彼は、繰り返し流される映像の前に立つ、ただの観客に過ぎないのだ。

揺らめく火炎の先に、一人の女性の姿を見た。

「……………っ……………」

彼女はこちらに気付き、何かを伝えようとした。しかし、彼の耳はその声を拾うことが出来ない。

「なあ、教えてくれよ。アンタは何を言おうとしたんだよ……………イスカ……………」

最後に一際大きな爆発が起こり、視界が赤一色に染まる。

彼女が残した言葉は、決して逃げるなどと言った喚起の言葉ではないのだと、リンユは考えていた。

「……………あれが、死に際の表情だと?」

リンユが見たイスカ・クルツIIイザレウスの最後の表情は、恐怖でも悲しみでもない。偽りのない笑顔だったのだから。



「目覚めたんですね! あなた、魔法を——」

「……………あれから何分経った」

「どうやら、全部覚えてるみたいですね。大体二十分です」

「そうか。迷惑をかけたな」

リンユがベッドから身を起こす。隣にはヒメリがいた。

「いいえ。ヒルデさんは荷物を取りに行っています。この先生は、別の業務で外へ。ミーシャは……………あなたが中々起きないので、飽きて授業に戻りました」

「……………? ああ、あのいつも隣にいる獣人か」

三人で運ぶ程自分は重かっただろうか、などと考えつつ、リンユは今が好機であることに気付いた。

「君に一つ尋ねたいことがある」

「はい、なんででしょうか」

「君、いつも変わった杖を持ち歩いているだろう。あれは、誰かから譲り受けたものか?」

「はい、街にいた魔法使いから、頂きました」

「その人はどんな人物だった? どういう状況で渡されたんだ?」

「女性で、背が高く、凄く美人で、右目に眼帯をしていました。突然私に、杖を手渡ししてきて。確か、未来ある若者には可能性を……………つて、あれ?」

ヒメリが驚いた様子でリンユを見た。その言葉をつい先ほど聞いたものと寸分の狂いなく一致していたからだ。

「そうか、やはりイスカが自分の意志で……………」

「え、あれ? もしかして、お知り合い?」

「母だ」

「うええあ!?!」

「随分な驚きようだ。まあ、イスカ・クルツIIイザレウスと言えば——」

「お母さん、お若いんですね!」

「そこかよ! ……つと、柄にもなくツツコンでしまった。まさかこ

「これまで無知な学生がいるなんて……」

「あなたまでミーシャと同じこと言うんですか！ 確かにちよつと世間知らずかもしれないませんが、言い過ぎだと思っただけです！」

「まあ、これで一つの可能性が潰えた。良かったような、悪かったような……」

「どういふことですか？」

「うん？ 君が母を襲った襲撃犯じゃないかってね。どうやら思い過ぎのようだ」

「それって、私がこの杖をお母さんから奪ったってことですか？ と、とんでもない！」

「まあ、やろうと思っても不可能だと思うがな。しかし、これで振り出した」

「お母さん、何か事件に巻き込まれたんですか？」

「……君は本当に何も知らないんだな。母はつい三か月前に、実験中の事故に遭って死んだ……ことになっている」

「だから私は馬鹿じゃ……え、死んで、あの死？」

「他にどんな死があるんだよ。別に君を巻き込むつもりはないから、これ以上は聞いてくれるな。あと、僕との会話についてあのガレットとかいう女には絶対話すなよ」

「ベアトリクスさんに？ 何で——」

「聞くなど言つたらうが。色々あるんだよ、色々」

「じゃあ他に聞いていいですか？」

「関係ない話なら、構わないが」

「クルツ……君は、本当に魔力がないんですか？ ヒメリさんに話は聞いたんですが、信じられなくて」

「空つてわけじゃない。さつきも、火花ぐらいは起こせただろう。生まれつき極端に少ないだけだ」

「でも、あなたは凄いな家系の生まれだつて聞きました」

「一般的に大きな器をもって生まれてくるというな。ただ、絶対というわけじゃないだろう。例えば君だって、両親は地主で魔法と関わりのある人生を送ってきたてはいないだろう。血筋を遡っても君のように魔道を生業とした人間はいなかった。どこかで才能ある人間が混じったのかもしれないな」

「ほ、本当に私のこと調べてたんですね……」

「杖について調べたからかな。結局、直接聞くのが一番早かった。しかし、君の才能を認めているというも本当だ」

「あの、私って、本当に、その、才能？ あるんですか？」

「僕や母の見立てが間違っている？」

「いえいえ！ そういうわけではないんですが、そんな自覚が全くなくて」

「当然だろう。才能があっても、まだ全然身がついていない状態だ。これからここで多くを学んでいけば、嫌でも気付かされるさ。自分が……特別な存在であるということに」

「それって——」

ヒメリがリンユの真意を問おうとしたとき、丁度保健室の扉が強く開け放たれた。

「失礼しまーす。つてうわあ！ リンユ起きたんですね！ ああ、良かった。もう目を覚まさないんじゃないかって」

「馬鹿か、魔力欠乏ぐらいで死んでたまるか」

「威勢もいつも通り、元気になりましたね！」

「人の体調を威勢で判断するのは止めてくれ」

「あはは。それはそうと、さつきの火花で教卓が焦げたから、弁償して欲しいですって……しばらくお肉は抜きです」

冷えた笑みを浮かべながら、ヒルデがリンユを責めるように言った。「おいおい待てよ。そんなもの、大した額じゃ——」

「今月ピンチって言ったじゃないですかー！ どうするんですか、リ

ンユのせいで今月の生活費更にカットなんですよ！ ……ああそうだ、リンユは晩飯要らないでしたねー」

「冗談じゃない！ 研究は一段落したんだ。しばらく徹夜することも無いのに、飯を抜かれてたまるか」

「うるさい、食べて欲しいときに食べないクセに！ リンユのバーカバーカ！」

「馬鹿はお前だ！ 余裕を持った消費活動をしていればこんなことにはならなかった！」

「はあ？ 馬鹿みたいに無駄遣いするのはいつつもいつつもいつつも、リンユの方でしょ！」

ヒメリは、それまで二人に抱いていた、近付きがたいというイメージが音を立てて崩れるのを感じた。これが本来の彼らなのだとしたら、まさしく年相応だろう。自分と変わらない、二人の素顔にヒメリは安堵にも似た喜びを覚えた。

「あ、あのー。そういうことなら、私の部屋、来ませんか？」

つい嬉しくなって、そんな言葉が口をついて出る。

リンユとヒルデの二人は、驚いたように顔を見合わせると、ヒメリに向かってゆっくりと頷いた。

続く

間章 同じ空の下で 一

「ぼ、化け物つ！ ひつ、うわあああああああ！」

血塗れの男がその場を逃げ出していった。

彼に付いていたのは仲間たちの血液だ。彼を残して、生き残りはいない。

男たちの亡骸の中心には少年と女性の二人。

「苦勞様。悪いわね、こんな汚れ仕事」

「いえいえ、これが俺の役割ですから。一応人目に付かないように、そこらの茂みに置いておきますね。後は獣たちがきれいにしてくれるでしょう」

少年は軽い手付きで死体を藪へと放り投げた。男たちの顔は皆恐怖で固まっている。

「自衛とはいえ、気分が良くないのは確かよ。ごろつき共も、相手を選べば良かったのにな」

「そういう意味では、女性とガキの二人旅なんて恰好の標的だったってことですね」

「その実が違ったとしても、あんな低俗な輩に見抜けるわけもなく… …か。彼らに罪のない人々が虐げられる、そういう未来を未然に防いだと、そう思うことにしましょう」

「……そうですね」

少年の返す言葉は暗かった。

「あら？ 美人商人との二人旅はつまらないのかしら？」

「とんでもない。このような機会を頂けたこと、本当に感謝しています。あまり、二人旅って感じはしませんか… …」

「そう？ ふふ、口元に血が残ってるわよ」

「ああ、すいません… …ん」

「ぴくってなったわね。可愛い」

「ちよつと！ なに乳繰り合つてるのよ馬鹿共が！ 目覚ましが野郎の断末魔とか信じらんない！ 殺すんなら音を出さずに片付けなさいよね！ 血の匂いまで野郎臭い……うっ」

馬車から怒号と共に少女が飛び出した。見た目で言えば、少年と同年代だろうか。

「すみません。まだまだ未熟なもので」

「……ふーん。血が付いたのは口元だけか。まあ、少しはやるじゃない」

少女の指摘する通り、少年は返り血の一滴も浴びていなかった。

「服を汚すと替えが大変なので、そこは気を付けました」

「別にそれぐらいすぐ用意するわよ。あなたは私の大事な用心棒なんだから」

「ははは。ありがとうございます、ベアトリクスさん」

「もう、ベアトでいいって言っているのに」

「何だかまだ慣れなくて」

「じゃ、私は二度寝するから」

少年とベアトリクスと呼ばれた女性を尻目に、少女は馬車の荷台に戻って行った。

「次の目的地はどこに？」

「近場の金山でおかしな動きがあったらしいから、その様子を見て、持ち主に報告ね。彼女……いえ、今は彼ね。現在はアールズにいるらしいから、最終目的地はそこになるかしら」

「ベアトリクスさんの母国ですね。地元は近いんですか？」

「ええ、ドンピシャよ。だから、久しぶりに家族の顔を見に行こうかと」

「妹と弟が一人ずついるのでしたね」

「ええ。あと父が一人と母が二人」

「……いつ聞いても変わった家族構成だ」

「そうかしら？」

「普通とは違ふと思えますよ。自分は、生まれたときから天涯孤独だったものですから、あまり分かりませんが」

「でも、素晴らしい育ての親と友人に恵まれたじゃない」

「ええ。故郷の皆には、感謝してもしきれません」

「それでも、生みの親には会いたいものなのかしら？」

「そりゃあ、まあ。母が生きているかどうかは分かりませんがね。雷夜の爺さんの言葉も気になりますし」

「なら、好きなだけ一緒に来るといいわ。私も君たち獣人には興味を持っていたからね。特に、君のような特別製には」

「はい！ 俺に出来る限りのことはさせてもらいますよ」

「頼りにしているわよ。シストラ君」

# 天球少女と生命の樹

シナリオ：矢野ヒカル

佐藤廻子(さとう めぐりこ)はお兄ちゃんの事が大大だーい好きな女の子。  
不登校なのは仕方ない、だってそういうオンナノコだから、ね。

もうひとりの「私」の脅威に怯えていた私だけど、実はもうひとりの「私」は私のお兄ちゃんだった。  
どうということ？

つまりお兄ちゃんの変態だってこと。

私は怒った。

私に扮して勝手に学校に行ったお兄ちゃんに対して。

だから、お兄ちゃんには言うことを聞いてもらった。

私の不登校を認めること。

そして、私を理解し、納得してもらおうこと。

相互了解への道。

それは対話。

対話の第一歩は自己紹介。

だから、私は言った。

地球が平面であることを。

対話は、まあ、ゆっくりだけど進んだ。ちょっとずつでいいんですよ。

そして、大きな事件がもう一個。

なんとか君(理事長の息子)が私にラブレターを寄こして「トリック・オア・トリート 僕と結婚か？  
退学か？」と気持ち悪く迫ってきたので私は退学を選択した。

廻子、退学。

長きに渡った私とお兄ちゃんによる学校に行くか行かないかの戦いは、そもそも行く学校が無くなるという形で幕を閉じた。

私の勝ちってことでいいのかな。

いいんだよね。

「なんで俺まで退学になってるんだよ！」

お兄ちゃんと一緒だから、ね。

「というわけで、まあ、俺と廻子が退学になっちゃったわけだよ」

『HAHAHA!!』

「何故爆笑する……」

『で、どうするつもりなんだ？』

「急に真面目になったな……。どうしたら良い？ 学校に行くという理由がなくなったからな。そっち行けばいいのか？」

『来んな』

「えええ！？」

『どうせチキンのお前のことだからまだあの子に手え出してないんだろ』

「息子にチキンとか言うなよ……。というか息子と娘をくっつけようとするなよ」

『いいんだよ。そんなことは、んで、まだなんだろ』

「まだです……」

『カーっ。腰抜け野郎には何言っても無駄だな。チキンチキン。コケエエエエ！ コケコッコオオオオー！！』

「ぶん殴っていいか」

『嘘嘘。冗談じゃないよ』

「冗談じゃないのかよ……」

『まあいいや。とりあえず、次にお前が私らに会うのは孫が生まれてからだ。それまでは会わないよ』

「はあ……そうですか……。つーかさあ、俺と廻子は兄妹じゃん……」

『知ってるんだろ。お前とあの子が実の……。いや、やめよう。あの子が聞いているかもしれない』

「そうだな……」

『よっし。お前ら温泉でも行って来い。んで、大人の階段上って来い。そしてコウノトリと共に私らの元へ来い』

「ちょ、何言ってんだよ」

『じゃーなー』

ブチッ。

ツーツーツー。

「お母さん、なんて言ってた？」

「温泉にでも行って来いってさ」



「怒ってなかったの？」

「爆笑してた」

「はは……そっか」

まあ、お母さんですから。

そんな反応は予測済み。

あれ。

というか。

温泉？

「温泉って……」

「行って来いって。ほら、ご丁寧に……」

パソコンの画面を示す。

メール？

「ご予約完了。一泊二日の温泉旅行。だってよ」

お兄ちゃんと温泉旅行！

やった！

でも、

でも、なあ。

活動限界。

生命の樹の妖精である廻子は一泊二日の温泉旅行に死んでしまうのだ。

嘘です。

離れることは可能。

経験上判断できる。

でも、離れたくないことも事実。

離れたら体調が悪くなるとか、そういうのはないけど……。

えっと、なんだろう？

あの、違和感……的な？

そんな感じ？

まあ、そんな感じですよ。

でもでも、一泊二日だし、そんなに気にならないよね。

行く前に木に触って、家に帰る前にも寄ったら、ね。

「そういえば、いつ行くの？」

「明日……」

「急だね」

「アイツらのことだからな。ま、とりあえず準備しますか！」

「うん。なにか持っていくべきものはある？」

「温泉だろ？ 特にこれといってないと思うけど」

「そっか。じゃあ、着替えとかだけでいっか」

「おう」

準備。

お兄ちゃんと二人っきり。

家でもそうなんだけど。

環境が変わると、お兄ちゃんも、変わるかなあ。

お兄ちゃんの変態だけどヘタレだから、私の着替えをあさるぐらいしかしなさそうだな。

それはいつものことか。

ほいほいと荷物を詰め込む。

適当に、軽く。

「軽く着替えとかだけって言ってなかったっけ」

「いやあ、オンナノコは色々と大変なんですよ」

「まあ、いいけど。俺が持つんだね。まあ、いいけど」

「ガンバッテ」

呼吸。

吐いて、吸う。

目的地である温泉地をイメージ。

向こうに行っても、ずっとそばにいるから、ね。

出発前、生命の樹に寄った。

バスの発車までまだまだ時間はある。

だからゆっくりと。

呼吸。

私は私の定位置で。

お兄ちゃんはお兄ちゃんの定位置で。

呼吸。

お兄ちゃんの方を見る。

うん。

前よりもいい感じ。

何が？

なんとなく。

お兄ちゃん、今何呼吸目？

世界のどこにいるの？

おっと。お兄ちゃんに見とれて、私の方がおざなりになっていた。

いかんいかん。

これもお兄ちゃんのせいだ。

なんてね。

ふふっ。

ひとつ。

ふたつ。

みつ。

幸せな呼吸、終了。

幸せな呼吸？

幸せな呼吸。

幸せな時間は早く過ぎると言うけれど、呼吸も早く済むらしい。

まだ、バスの時間には早い。

どうしょっか。

「上まで行こうよ」

「廻子、あそこに行って大丈夫なのか？」

「大丈夫、大丈夫、お兄ちゃんが触らなかつたらね」

じーっと、見る。

「イヤア、ソナコトシナイヨ」

「じーっ」

登る。

「安心してくれ、今回はもう何もしない。っていうか、前回のは廻子の連絡ミスというか」

「えー。私のせい？」

「そういうわけじゃないんだが」

「さあ、そろそろつくよ」

「おっ、そうだな」

今回は、ちょっとだけ、サービス。

てっぺんに立つ前に、お兄ちゃんに抱きつく。

「め、廻子……！？」

サービスだよ。

私に、ね。

美しい世界。

この世界は、素晴らしく美しい。  
生命の樹の頂上から、世界を見下ろす。  
地球が球体だなんて、デタラメだ。  
だって、ここから全てが見えるから。  
世界の果てまで……。  
地の果て。  
海の果て。  
地平線。  
水平線。  
あの、空と海との境目。  
あそこは、どうなっているのだろう。  
空の一部が海に溶けているのだろうか。  
海が空になるのだろうか。  
確かめたい。  
でも、歩むことが出来ない。  
どうしても。  
足りない？  
何が？  
何もかも。  
だから今は見るだけ。  
見るだけ。  
でも、それでいい。  
わかるから。  
普通になっているんだなって。  
普通に、普通になっているんだ。  
だから見る。  
美しい世界を。  
世界全てを。  
この目で。

それにしても、私はなんでこんな体勢なんだろう。  
胸のところで、腕で輪っかを作ってる。  
これは……、  
まさか！  
私の胸囲がここまで大きくなるという予言的な何か！  
やった。

勝ち組だ。

ちょっと大きすぎる気もするけど、大は小を兼ねると言うからね。

やった。

なーんて。

木から降りる。

ちょうどいい時間。

なんだか嬉しい。

お兄ちゃんを見る。

なんだか嬉しそう。

にやにや。

にやにや。

バスに乗る。

二人がけの席。

頭をお兄ちゃんの方に寄せる。

到着するまで、ね。

おやすみなさい。

まどろみ。

夢から醒めても、目は醒めない。

なんだか心地よい。

起きてるような、寝てるような。

幸せ。

退学してから、幸せ。

前から幸せだったけど、今の方が、もっと、幸せ。

特に今日は幸せ。

生命の樹で、呼吸と、頂上からみえる世界。

幸せで、美しい。

美しいのは、幸せ。

お兄ちゃんと一緒にいられる、幸せ。

幸せ続きでとろとろに溶けてしまいそう。

でも、相場は決まってる。

幸福の後には不幸が来ると……。

予感は、当たった。

「つつつつ、つまり。室内の温泉だとここここ混浴は可ということですか！！！！」

「……………そのような行為を制限する規則はございません」

「ひょおおおおおおおおお」

不幸、というか恥。

というか変態。

「めめめ廻子おおおお、聞いたか、聞いたか！？」

「うん。でもしないよ」

「ひょえええええええええええ」

私はまともそうだと、受付の人の目。

頑張ってくださいと言われたような気がした。

軽く会釈した。

部屋に到着。

ほんとだ。

部屋に露天風呂がある。

「さて、廻子、ここに温泉がある」

「お兄ちゃんはそこで。私は大浴場行ってくるから」

「待て」

腕を掴まれる。

「待たない」

「待て！」

大きな声。

お兄ちゃん、本気？

「待つんだ……」

振り返る。

涙目？

膝をつき、渾身の……

「一緒にお風呂入ってください。お願いします」

土下座。

何故、この人はこんなにも本気になれるのか。

人の心を動かすのは、同じく人の心意気。

その心意気に、私は心を動かされた。

廻子。

直立不動で下を見る。



「でも、思い出してくれ。それらは全て廻子の意識がない時だと！」

「つまり！ 俺は廻子の意識があるときにはセクハラをしない！」

確かにそうかも……そんなことないな。

「制服の件は？」

「あ……あれは堂々と白状したからノーカウント」

「アウトです」

「セーフ！」

「アウト」

「ぐぬぬ。一筋縄ではいかないようだな。じゃあ……」

お兄ちゃんが服を脱ぐ。

上半身裸になる。

「やってやろうじゃねーか。入るか入らないかの本気のバトルをな！ ゴゴゴゴゴ……」

「やらないよ」

「廻子、本気で言ってる？」

「うん。なんかもう飽きてきたし」

「ちょっとやめて、そういうのやめて。というか何が問題なんだ？」

「全部」

「裸の付き合いがまずいの？」

「男と女が一緒の風呂に入るという時点でとんでもないエロス」

「いや、兄妹だし」

「兄妹でもエロス」

「水着着てても？」

「エロス」

「服を着てても？」

「エロス」

「それはおかしい」

「だってさ。俺達は今、服を着て、二人っきりで密室にいる。それすらもエロスじゃないの？」

確かにそうだな。

この状況はよく考えるとかなりのエロス指数だな。

お風呂に入るというのも空気がお湯に変わるだけなんだよね。

でも、流石に服着たまま入るのはちょっと、ね。

「百歩譲って、全裸じゃなかったらいいけど、私、水着も持ってないよ」

瞬間、お兄ちゃんが不気味に笑った。

「勝った……」

「？」



「勝った。勝った。勝った勝った勝った勝ったあああああああああああああああああああああ  
あ！！！！！！！！！！」

「！？」

な……なんだこれは……。

「コシを見ろおおおおおおおおおおお」

荷物の中から取り出したのは、

スクール水着。

「そんなの私持ってたっけ？」

「俺が買ったんだ。俺の金で。お前の為に」

「えええ」

「とにかく、コシを装備さえしてくれたら一緒に入ってくれるということだな」

「う……で、でも。サイズ合うの？ それ？」

「とりあえず着てみてくれやあ」

うーん。

まあ、仕方ないなあ。

装着！

ぴったり……。

ちょうどの大きさ。

「なんでこんなにぴったりなの？」

壁越しに聞く。

「企業秘密です」

「私に隠し事する気？」

「……服から推測しました」

寝ている間に脱がされたとかじゃないのね。

健全健全。

健全……なのか？

「じゃあ、入ってきていいよ」

私は部屋で、お兄ちゃんはトイレで着替えていた。

「ほんとに着たのか？」

「疑い深いなあ。ちゃんと着たよ」

「じゃ、じゃあ。出るぞ」

「いきなり飛び掛かってこないでね」

「わかってるって」

ガチャ……。

「……！」

歩く。

ゆっくり、歩いてくる。

人ってこんなにも笑顔になれるんだってぐらいの満面の笑み。

なんだかこわいぞこのひと。

き……きんきゅう回避っ。

湯船にちゃぽん。

「はっ！ 廻子！？」

良かった。トランスモードが解けたみたい。

「いやぁ。あまりの可愛さに俺の顔面がグロ画像化してたな……すまんすまん。」

グロってほどじゃあないけど……、まあ、びっくりした。

至高の笑顔は怖くなるんだな。うん。

「いやぁ、廻子は何着ても可愛いけど露出度の暴力はさすがだなぁ」

「水着を兵器みたいに言わないでよ」

「まさしく兵器だよ。人も殺せるよ」

「ほんとに死にそうだけど……死なないでね」

「もちろん。まだ死ぬ気はない。この上にビキニがあるからな」

「ビキニも着せるつもりなんだね……」

「もちろん」

私とお兄ちゃん。

お風呂に入り、一服。

ちょっと懸念してたけど、まあ、襲い掛かってくることもなかった。

よいよい。

二人でまったり。

温泉を楽しもう。

「それにしても……」

「？」

「あったかいなぁ」

「温泉に来てその感想？」

「確かにそうなんだけど、横に廻子がいてさ、なんかさ」

「あったかいなって」

温度のこと？

そうだけど、そうじゃない。

温度は高い。

でもそれは、家のお風呂でも同じ。

あったかいと言えるのは、温泉のおかげ。

そして横にいるから、ね。

暑いわけでも、熱いわけでもなく。

ひたすらに、あったかい。

「廻子……」

「どうしたの？」

「なんか拒絶してたわりに普通だなって」

「そりゃあ、もともとこうなるつもりで来てたから」

「そうなのか！？」

「そうだよ」

「じゃあ、なんで一緒に入る気ない素振り見せたの？」

「ふいふん。形式美だよ」

「なんだそれ」

「しょうがないな～お兄ちゃんがそんなに必死なら言うこと聞いてあ～げる、的な、ね」

「ははっ、なんなんだそれ」

「妹の嗜みですよ」

うん。私も一緒に入る。でもいいんだけど、それじゃあ慎みが足りないから。

結果は一緒だからどっちでもいいといえはそうなんだけど。

たまには過程も楽しまないと、ね。

「あ～。きもちいいなあ」

「そう言って肩に手をまわしてこないでよ」

「廻子の感触がきもちいい」

「お兄ちゃん、きもちわるいよ」

「ぶかぶか。ああ～お湯の流れに流されて俺の手が廻子の胸の方向へ流されて～これはお湯の流れだから仕方がない～」

「てしっ」

「いたい」

「お湯の流れじゃないよね。故意だよね」

「故意かどうかは置いていて」

「置かないでよ」

「さっきと同じ理論で言うと、廻子は口ではそんなことを言ってるけど実は『お兄ちゃん、触ってえ』と  
思っているんだろ」

すい〜。

対岸へ移動。

「あっ、ちょ廻子！ どこに行くんだい」

「お兄ちゃんに触って欲しいかどうかは置いていて」

「置くなよ」

「お兄ちゃんのセクハラ発言にもう耐えられません。別居です」

「そんなぁ。……でも、会えない時間も恋の内と言うし、この距離が愛を育むのだ」

何言ってるんだか。

「別居は悲しいが、それ故に見える世界もある」

「何の話？」

「廻子の身体。横にいると全体像が見えない。でも、正面に向かい合うとよく見える」

「ミクロな視点では見えないものも、マクロの視点では見えるのだ！ こんなカンジ？」

「そう。でも、マクロでは見えないものもある。結局、色んな視点から見るのが大切ってこと」

いい事言うなぁ。

私の体を血眼になって見ていなければ、だけど。

「お兄ちゃん、そんなに本気で見なくても、廻子は逃げないよ」

「そう言ってくれるのはありがたいが、この一瞬を無駄にしたいくないというか……」

いい事言うなぁ。

廻子の身体を視線で弄んでなければ、だけど。

「お兄ちゃん、顔真っ赤。上がったらどう？」

「いやだぁ。廻子の身体もっと凝視していたい！」

私を見るから熱くなるんじゃないのかなぁ。

「足湯とか、どう」

「それだ！」

お兄ちゃんは身体を出して、足だけお湯につける。

廻子？

私はまだ大丈夫です。

お兄ちゃんの水着姿を見ただけで熱くなるほど子供じゃないですよ。

ね？

……………

……

ちょっと熱くなってきたな。

「そう言えば廻子、この温泉には豊胸の効能があっただな……」

「ないよね？」

「……はい」

「ところで廻子」

「？」

「いつになったら別居を解除してくれるんだ」

「まだまだ」

「ええーセクハラ控えてるじゃないか」

さっきした所じゃねーか。

「残念ながら、お兄ちゃんは自分では気づいてないけど、相当セクハラです」

「そんなつもりはないんだけどなあ」

「潜在的セクハラ発言。いや、お兄ちゃん存在自体がセクハラ？」

「そんなあ」

「温泉でしかできないこと……」

「温泉でしかできないこと？」

「折角温泉に来たけど、私達いつもどおりじゃん」

「そうでもないんじゃないか」

「そう？」

「温泉という普通じゃない場所。そういう特別な場所ではそこにいるだけでいいんじゃないかな」

「そうなの？」

「なんとなく。会話内容はありふれてる。けど、ありふれてるって特別じゃね」

「？」

「廻子と過ごす日常は特別ってこと」

「むむう……」

つまりは、いつも特別。

だからこれ以上特別なことなんてない。

現状維持で満足……。

つまりはヘタレ？

「お兄ちゃんはヘタレ」

「ひどいっ！」

ヘタレヘタレ。

すっごいへたし。

チキン。

甲斐性なし。

ここは、「じゃあ、ここでしかできないこと、やる？」とが言ってお姫様抱っこでベットまで……。

違うな。

そんなのお兄ちゃんじゃないな。

もしそんな状況になったらお兄ちゃんはまた顔面がお兄ちゃんの言うところのグロ画像になるだろうな。

でも、いつかはそんなことに……。

……………

……

……私も足湯にしよ。

「そう言えば廻子、この温泉の豊胸効果は胸を揉むとより強くなってだな……」

「ないよね？」

「……はい」

バシャバシャ。

足をバタバタ。

お湯が飛沫をあげる。

「これこれ廻子よ。はしたないですぞ」

誰だこの口調。

「水着着たらとりあえずこんな感じじゃないの？」

「そうなんだけどね」

バシャバシャ。

お兄ちゃんもバシャバシャ。

飛沫が飛び交う。

「お湯ってさ、小さい雫になるとさ、すぐに冷たくなるよね」

「そうだな」

「私は身体を冷ます意味でちょうどいいけど、お兄ちゃんは大丈夫？」

お兄ちゃんが足湯にシフトしてからは結構時間が経った。

「せだな。寒くなってきた」

お兄ちゃんは再度お風呂に全身を。

この時気づいていなかったのだ……。

「ぐへわあ。顔面に直接水飛沫が！」

へへへ。

「いやぁ。ごめんごめん」

「まったく……」

ごめんなさいの意味を込めて……。

ささっ。

お兄ちゃんの後ろに移動。

「おっ！ ついに別居解除か！？」

湯船に浸かってるから、お兄ちゃんからは私が見えない。

だから、いいよね。

脚を開いて……。

「おおおお……おいおい。ななな……はしたない！！」

「嫌？」

足湯してるだから健全だよ。

ね？

「まったくそんなことはございません」

お兄ちゃんの頭の後ろで大きく股を開いてるなんてオンナノコ的にはあり得ない姿勢だけど。

「どう？」

にやにや。

「いやぁ。いい気分なんだけど、これはちょっといやらしいといえますか……」

「そうだね……、脚広げすぎたね」

「個人的には嬉しいんだけどね、まあ、その……」

「じゃあ、もっと狭くしなきゃね」

脚がお兄ちゃんの両肩の上ぐらいになるまで移動させる。

うわぁ、何だこの格好。

やってるこっちがめちゃくちゃ恥ずかしいぞ。

「あばばばばばばばば。太ももががががが脚ががががが」

お兄ちゃんはそれどころじゃないっぼいね……。

「温泉、気持ちいいね。おにーちゃん♪」

にやにや。

にへら。

にやにや。

にへら。

「きゅ～」

お兄ちゃんが倒れました。

のぼせたようです。

体を拭いてあげて、布団に寝かす。

ちょっとご褒美が過ぎたかな

でもね。

にやにや。

もっとしてあげるよ。

いつもセクハラ発言されてるから、仕返し。

セクハラにはセクハラを。

今までにされたセクハラ分……

さっきのアレと、今度のコレで、おかえし。

がさごそ。

大きな荷物にはわけがある。

目的のブーツを取り出し、装備。

完了。

へへっ……。

このアイテムは凄いいんだぜ。

「……っ」

あ、起きた！

「う……」

「お兄ちゃん、おはよう」

「めぐり、こ？」

「うん。そうだよ」

「あれ、俺……」

「のぼせちゃったんだよ」

「そうか……ごめんな」

「いやいや、こっちこそ」

そのおかげで準備ができたんだからね。

「……？ って！？」

気づいた。

「ここ……これは……」

「膝枕だよ」

「……この、頭がのってる気持ちよいのは……」

「膝枕だよ」

「ひょおおお！！！」



にやにや。

「暴れない暴れない」

「はあ……はあ……」

疲労困憊の模様。

「落ち着いて落ち着いて」

お兄ちゃんの手で目を隠す。

「ほらほら、いい子いい子」

「どうした！！ 廻子、急に母性に目覚めたのか？」

「セクハラされた仕返しです」

「よしっ。俺、これからずっとセクハラする」

「だめだよ。そんなこと言っちゃ……」

「でもな、廻子にセクハラされるのって俺にとってはご褒美でしかないわけで」

「じゃあ、今はこのご褒美を受け取って。後のことなんて考えなくていいから」

私は何を言ってるんだろう。

のぼせてしまったのは私もじゃないか。

「おおっ、この甘美を享受する」

目隠しになってた手をのける。

「これが天国か……」

「おお……」

「おおっ！！」

ぎょっとするお兄ちゃん。

「廻子、その格好……」

「流石に上は寒いからパーカー」

「すくみずばーか。その時点で萌え強度がとんでもないというのに……さらに……」

「眼鏡……だと……」

眼鏡だよ。

度が入ってない伊達眼鏡だから、原理主義者の人には受け入れられないと思ったけど。

お兄ちゃんには効果バツグンだね。

「ふへへ。ふへへへ」

！？

またお兄ちゃんが笑顔の向こう側へ。

逝ってしまった。

起きた。

「なんで眼鏡なんですか……」

「ただの伊達眼鏡です。萌えアイテムです」

「伊達眼鏡が萌えアイテムなのは了解。俺は原理主義者じゃないのでストライク」

「問題は何故急に廻子が萌えキャラになったのか……ふへへ。やばいわ。興奮するわ」

「にここにこ」

私はお兄ちゃんの事、好きだよ。

「えっと、廻子？」

だからいいじゃん。

「にここにここにこ」

理由とか、今はいいじゃん。

「えっと、話が進まないな」

「つまりはこういうことか。この状況についての考察は遠慮してこの美しくも美しい世界を受け入れる、と」

「そ」

「じゃあ、堪能する」

「うんうん。それでいいんだよ。ご自由にどうぞ」

どうぞ。

お兄ちゃんかく語りき。

「眼鏡の美しさについて語りたと思ったけど、廻子が眼鏡してるだけでいいやもう」

「堪能した！ でも、まだまだ堪能するぜ！！」

「眼鏡ってさ」

「？」

「不思議だと思う」

「不思議？」

「目の悪い人には必需品。俺も廻子も目は良い方だけど、悪い人はないと生活できないじゃん」

「そだね」

「あと、サングラス。サングラスを眼鏡のカテゴリーにいれてしまうと原理主義者の方に殴られるけど、あれも目に掛けるじゃん」

目に掛けるって表現はなんか、なんだかなあ。

でも、理解。

「サングラスも重要だよ。強い光から守ってくれる」

「そうそう。さらに、今みたいに幸せを提供してくれる存在にもなる。大げさだけど、全然大げさじゃない」

「眼鏡廻子は幸せの運び屋なんだね」

「うん。ああ、あとはアシだ、PC用眼鏡なんてものもある」

「アレ、効果あるのかなあ」

「一応あるという名目で売り出してるからなあ」

「とかく、眼鏡には色んな可能性があるってことだ」

「つまりは眼鏡すげーってこと？」

「ああ、すごいな」

眼鏡の凄さ。

人は、眼鏡を求めた。

だから眼鏡は存在する。

眼鏡はいつも、あなたの側に。

伊達眼鏡を、はずす。

されど「眼鏡」はずれない。

「あれ。萌え萌え廻子タイム終了？」

そんなことないよ。

廻子はいつでもお兄ちゃん専用の萌えキャラだよ。

それに、

「眼鏡はまだ掛けてるよ」

あなたの目の前に、ほら、あるでしょ？

「色眼鏡……」

「色眼鏡？」

「そう。色眼鏡」

「色眼鏡、とは？」

「色のついたレンズがはめてある眼鏡」

「その伊達眼鏡透明レンズだよね」

「うん。このレンズは透明。今話してるのはモノとしての眼鏡じゃない」

「モノとしての眼鏡じゃない？」

「というか、廻子急にどうした？」

「萌え萌え廻子タイムは終了です」

パーカーのチャックを閉める。

膝枕も解除。

お兄ちゃんと向き合う。

「ああ、温もりが……」

「また今度。十分堪能したでしょ。ね？」

「はい。堪能いたしました……」

「それに、膝枕くらいいいくらでもしてあげるよ」

「!？」

当然、それ相応の見返りは求めるけど、ね。

「だから、今度は真面目に、ね」

「対話、しよっ」

対話は、相互了解 99%への道。

唯一の手段。

お兄ちゃんは言った。「急にどうした？」

と。

確かに急に態度が変わったのはわかってる。

でも。

どっちも私だから、ね。

萌え萌え妹も廻子。

対話モードも廻子。

どれも廻子。

全部知ってほしいから。

ずっとお兄ちゃんを甘やかすのもいいんだけど、せっかくの温泉旅行じゃないか。

いい機会。

前回の対話の続き。

まあ、前回は自己紹介しかしてないけど……。

でも、対話って壮大な自己紹介だよな。

だから、まずは、

場所を移動。

湯船に腰を掛け、足湯。

「相互了解度……82%じゃまだ不満と申すか」

「そうだね。それに……」

「あれから私も成長したからね。あのときは 82 だったけど今は 81.9 ぐらいに減ってると思う」

「そうか。日々成長しているんだな」

「ふふん。そうだよ。そのとおりだよ」

「チラッ」

「視線を下げない！ 胸をまじまじと見ない！」

「申し訳ない……。それで、今回の目標は？」

「90%」

「大きく出たね」

「とりあえず最初は大きい数字を出すのです。鉄則です」

「そうか。結局は 85 ぐらいに落ち着くのかな」

「そうかもしれないけど、目指すは 90」

「OK 了解。ところで、廻子の俺に対する理解納得度はどのくらい？」

「92 ぐらいかなあ」

「高いなあ」

「学校の話はよく聞かされたし、お兄ちゃんが読んだ本は全部私も読んだから」

そして了解度が高くなるにつれて愛情度も上がっていく。

私は自分がお兄ちゃんを好きになることに必死で、好きになってもらうことを忘れていたんだ。

私は「人は自分のためにしか生きることが出来ない」という思想を持っているが、一人では生きていけないのも事実。

それを少し勘違いしていたんだらう。

変わったのは、いつだらう？

お兄ちゃんにキスした時かなあ。

「そうか。じゃあ、俺も 90 にしなきゃな」

うん。

そうだね。

私のために？

そして、お兄ちゃん自身のためにも。

「といっても、思想のお話なのでもしかしたら知ってるかも」

「何かの本とかの受け売りならそうだな」

私はお兄ちゃんが読んだ全ての本を読んでいる。逆も然り。

「自分ではオリジナルのつもりなんだけど、潜在的にはすっごく影響受けてると思う」

「そうか。んじゃあ、前よりは理解が楽かな」

「そうかも」

対話。

色眼鏡と世界。

世界に色ってついていると思う？

「ついているだろ」

そうだね。

確かについている。

でも、ここで言うところの世界は、私達が見ている世界ではない。

世界それぞれのもの……。

私が見る前に存在している世界……。

それに、色はついていると思う？

私は思わない。

世界には色なんてない。

世界は世界として存在している。

なにか、透明な光のようなもの。

それが世界。

でもさ、そんなことを言ってる私でも世界に色を見ている。

世界は色で満ちている。

世界は透明な光、されど世界は色。

なんて、矛盾めいたことを言うと格好良く聞こえるよね。

このままここで対話を終わらせると凄くかっこよさげなんだけど、それじゃあ対話の意味が無いからね。

だから、続き。

世界に色を与えてるのはさ、私なんだよ。

私が光を色に変え、世界を色と見ている。

もっと言うと、私がかけている眼鏡。

色眼鏡によって、透明な光が色づく。

フィルターを介して見る世界、それが私の世界。

私の世界と言ったのは、私とお兄ちゃんでは見える世界が違うから。

お兄ちゃんと私の色眼鏡は異なっている。

私は私の色。

お兄ちゃんはお兄ちゃんの色。

その他大勢は、それぞれ固有の色で。

世界は色を持つ。

そして、その世界はどれ一つとして同じものではない。

私の世界とあなたの世界は違う。

私はひたすら私の世界を。

お兄ちゃんはひたすらお兄ちゃんの世界を。

あなたはひたすらあなたの世界を。

生きる。

それだけ。

この色眼鏡はさ、普通の眼鏡とは違って外せないんだよ。

私は私の世界しか見れない。

世界そのものを見ることは出来ない。

でもさ、その代わり、見たい世界が見えるんだ。

世界は、私が見たいように見える。

私が望んだ世界を。

そんなこと望んでない？

そう。

私も声にして望んではない。

でも、潜在的に。

気がつかないうちに……。

表の意識の裏側で。

いつの間にか望んだ色眼鏡を掛けている。

世界は見たいようにしか見えない。

世界は見たいようにしか見るができない。

「ふむふむなるほど。色眼鏡はそういう意味ね」

まだまだあるよ。

世界は光。

世界が発した光は、色眼鏡を通過して、色に変わる。

その色を私達は見ている。

その色は眼の奥に到達して、反射する。

反射したら世界まで戻っていく。

世界が私の色で染まってしまった。

『『私』の世界だけでなく、世界そのものが？』

うん。

「まじで？」

嘘だよ。

「嘘なのかよ！」

嘘なんだけど、どうにもそうなってしまったらしい。

「どっちだよ」

私だけじゃなくて、お兄ちゃんの色も反射する。

その他大勢も同じく。

世界そのものは私の色、お兄ちゃんの色、その他大勢の色で染められる。

世界は色で染められる。

「世界は無色。色ついた世界は各々の世界。でも、その各々に影響され世界は染まる」

本当はそんなことはないのに……ね。

「世界は色ついて見えてしまう。あたかもそれが本当の世界のように……」

一般的な世界。

そんなものに見えてしまう。

世界そのものが見えてしまう。

そう思ってしまう。

「でも、それは嘘なんだよなーみたいな」

そのとおり。

嘘なんだよ。

こんなのはただの嘘。

みんなの独断が集合して、そう見えてしまうだけ。

世界そのものなんてないのに、ねえ。

「それを嘆いているのか？」

いや。

反応を見るに、お兄ちゃんはこの話を了解してくれたっぽいし、それでいいや。

一般的独断の世界の先に、光としての世界が……って、ね。

「ははっ、そうか」

そうそう。

ねくすと。

色眼鏡の色は変えられるんだよ。

「まあ、望んだ色が見えるならな」

変えようとして変えられるものじゃないけど。

変えることが出来るんだ。

「自分が望んでも望みは変えられない。されど、望まなければ変えられる、的な？」

「なんか意味深だな。カッコイイ！」

お兄ちゃんカッコイイ！

「いえー」

やー。

ごほんごほん。

何言ってるのかわからなくなってきた。

別の方向から考えてみよう。

人生は選択の連続なーんて言われるけどさ、

「そうは思わないんだろ。廻子と、多分俺は」

にここに。

そだよ。

選択なんて、あるわけないんだよ。

「人生はゲームじゃない、みたいな？」

ゲームでも同じ。

「あれ？ そうなの？」

選択肢が出てくるゲームでも、その選択肢を考えて選ぶことは出来ない。

どの選択肢を選ぶかは既に決まっている。

これまでのゲームの内容、プレイヤーの思想。



その他もろもろで選択肢が出てきた瞬間に選ぶ選択肢は決まっている。

でも、私達は選択肢を考えてしまう。

どれにしよう。

どれが一番いいのかな。

それらの思考は全て後付け。

既決の選択を論理的に肯定しようとしているだけ。

はじめから決まっている選択肢を、あたかも自分が選んだかのように。

自己肯定。

自分は自分の意志で、今、選択肢を選んだ。

でも、その選択肢は、実はね。

にやにや。

「決まっていた。決めていたと言ってもいいかな」

「で、いつ決まったのかなんだけど」

いつの間にか決まっていた。

それまでの行動。

それまでの出会い。

それまでに見たもの。

それらに影響され、決まった必然的な選択。

選択肢は必然。

でも、その必然に至るまでの過程はひたすら偶然的。

たまたま、見た。

たまたま、聞いた。

たまたま、匂いをかいだ。

たまたま、味わった。

たまたま、触れた。

たまたま、思った。

【朗報】廻子が『たまたま』連呼」

顔面パンチ。

「ぐひょお」

とにかく！

「すみません」

そういった偶然の結果、必然的な選択は生まれる。

色眼鏡も、同じように。

それまでの偶然！ によって、必然的に色は変わる。

「シュン……」

それが、『変えようとして変えられるものじゃないけど、変えることが出来る』

の意味。

「理解理解。納得納得」

ホントに？

「ほんとに！」

じゃあ、説明して。

「廻子がたまたまを……」

チョップ！

「ほげっ」

「冗談冗談」

ホントに？

「ほんとに！」

「つまりはあれだ。偶然が必然を呼ぶ。いざ変えようとして変えるものではないが、必然的に変わっていく」

最初からそう言ってよ……。

「それは必然的なもので自由では無いが、自分の意志のおかげとってしまう。自由だったとってしまう」

「だから、見たい世界が見える。」と」

うん。了解してるみたいね。

一応、まとめると。

- ・世界は自身の色眼鏡によって見たいようにしか見えない。
  - ・選択肢は既に決まっており、選択肢を考えて選択するのはありえない。
  - ・色眼鏡の色や選択肢は様々な偶然が組み合わさって引き起こされる必然的結果である。
- そしてその必然を、

私は運命と呼ぶ。

つまり、私はこの世にいっぱいいる人間から選択したんだよ。

お兄ちゃんを。

運命的に、ね。

夜ご飯が部屋に来たみたい。

対話はちょっと休止。

ご飯にしましょう、お兄ちゃん。

もぐもぐ。

流石に水着＆パーカーで中居さんを迎えるわけにはいかなかったので、体を拭いてスカートを履いた。

下スカート。

上パーカー。

中身スク水。

なんとも言えないが、ぱっと見たカンジ異常なし。OK です。

「そういえばさ」

「何？」

「別に色眼鏡にする必要なくね」

「えっ？」

「取り外し付加だろ。だったら眼球とか、ほかのもんでもいいんじゃないね」

「まあ、そうなんだけど……」

「心のフィルターとかさあ」

ううっ。

「眼鏡である必要って……」

そこは別にいいじゃん。

重要なのはそこじゃないじゃん……。

「……もう眼鏡掛けてあげない……」

「！？」

「そんなこと言うならもう眼鏡掛けてあげない！」

「！！！！！！！！」

もぐもぐ。

もぐもぐ。

「申し訳ありませんでした」

「それで？」

「もう一度、あの眩しき眼鏡をもう一度」

「否、何度でも！！」

「ふーん。そっか。で、私の色眼鏡論についてなんか言ってなかったっけ？」

「滅相もない」

眼鏡を掛ける。

「ありがたや！　ありがたや！」

ご飯終了。

食後すぐお風呂に入るわけにはいかないから、しばしまったり。

「なあ廻子、俺は萌え萌え廻子を所望する」

「なぜに」

「さっきは俺が気絶したから実質そんなに味わえてない」

「せっかくだからもっと堪能したい」

そうかそうか。

そうであったか。

その願い、叶えてあげよう。

「何言ってるんですか……兄さん」

「!？」

「まったく兄さんは Hentai です。妹に何を求めているんですか」

「こっこここっこここっここ、これは……」

「そんなんだからいつまでたっても彼女が出来ないんですよ」

「兄さん呼び敬語妹キター—————」

「しょ、しょうがないから、私が彼女になってあげても……」

もじもじ。

「えっ、何だって？」

「な、なんでもないですよ」

形式美。

「しかもデレ有りかよ。兄さん呼びツンデレ敬語眼鏡妹かよ。属性過多で死ぬぞ！ 俺が!」

「兄さんなんか死んじゃえ！」

「いわれのない誹謗中傷。これまた気持ちいい」

その後も

「兄さんの Hentai」

「兄さんのバカ！ 鈍感！」

「……大好き(抱きつきながら)」

などなど、直球に変化球を混ぜお兄ちゃ……兄さんを翻弄した。

その結果。

「萌え尽きたぜ……」

ちょっとやり過ぎたと反省。

布団にはたん。

ごろごろ。

眼鏡は禁術指定されました。

いざという時以外は使用禁止です。

いざという時は積極的に使用すべきだと言われました。

ごろごろ。

お風呂。

今日はお風呂に入っただけ、身体は洗ってないからね。

流石に今回は別々に。

これ以上すると俺が爆発してしまうんだが。

とお兄ちゃんも言ってたし、ね。

自重自重。

お風呂から出たのに、まだ温かいなあ。

布団は二つ並んで。

隣同士で。

でも、ふぅっと息を吐くと、体の中が空洞になる。

荷物から取り出す。

生命の樹の葉っぱ。

これを握って、もう一度呼吸。

大丈夫。

大丈夫……だから。

……。

大丈夫になった。

これで。

安心しきって、布団にばたん。

「廻子、そういやさ。これを聞かないと始まらないんだが」

前置きが長い。

「お前はどんな世界を見ているんだ？」

色眼鏡の話はあくまでも世界の見見え方が人によって異なるというだけのもの。

その先について話さないことには理解の道は拓けない。

「その前に、お兄ちゃんの世界を教えてよ」

「……いいけど……」

隣の布団で、私と同じように天井を見上げながら言う。

「俺は、普通の世界を見ていた」

「特に意味なんてない。普通に生きていた」

「普通だから、廻子を学校に行かせようとした」

「理由は簡単。それが普通だから」

「学校に行く意味について廻子に聞かれた時は適当にごまかした」

「普通に学校卒業して、働いて、廻子と一緒にいたかった」

「廻子の俺に対する気持ちは知っていたつもりだし、それでいいんだと思ってた」

「でも、どうしてか廻子は学校に行こうとしなかった。」

「俺はそれについてあまり追求はしてこなかったつもりだ」  
「廻子は廻子で、俺は俺で、相互了解は 80%ぐらいで」  
「好きだった学校に行かなくなった理由は追求せずに……」  
「それぐらいが一番気持ちいいんだと思ってた。お互いにとってな」  
「そんなことを思ってる時に、俺はやらかした」  
「最初は廻子を学校に行かせるつもりだったんだけどなあ」  
「俺の為の行為になってた」  
「人間は自分の為にしか行動出来ない。いつか廻子が言ってたな」  
「そのとおりだ。まったくそのとおりだ。だが」  
「相手を想わなくなったら人間として終わりだ」  
「自分の為？ 結構。でも、ちょっとは相手を考えて」  
「そう思うんだよ、今の俺は」  
「失敗したなあって思って、それから廻子の事をよく知ろうとした」  
「今日の対話もそうだな」  
「正直、『各々が見る世界は異なる』っていう思想は既に持っていた」  
「でも、なんつーか。廻子の話を聞いているうちに、思った」  
「廻子の見ている世界が見たいって」  
「相互了解度が 100%に近づけば廻子と同じ世界が見えるんじゃないか」  
「だから、こうやって話している」  
「質問の答え。俺の見ている世界については」  
「くだらん世界を見ているよ」  
「ただし、今はな」  
「これから俺が見る世界、つまりは廻子の世界については……」  
「廻子の答えを聞こうか……」

左手を伸ばした。  
お兄ちゃんの手を握る。  
握り返してくれる。

伝えるために、口を動かす。  
明確な意志を持ち、  
お兄ちゃんに響き届くように、ね。

対話。  
美しい世界。  
私が見ている世界。

一つは今見ている世界。

これは多分お兄ちゃんと同じ世界だと思う。

これについてはもう説明しなくていいかな。

もう一つの世界。

私が見ている世界。

私を私たらしめている世界。

それは、生命の樹の頂上から見える世界。

美しい世界。

美しく、全てが見渡せる。

この世の全て。

海の外の大陸も、何もかも。

世界の果てまで。

地球は平面なんだよ。

美しき世界では。

だってそう見えるから。

どうしても見えてしまうから。

平面の地表に空のドームがかぶさっている。

中心は生命の樹。

ドームの天頂は生命の樹が支えていて、手を伸ばせば多分届くんだけれど、御存知の通り動けないんだよね。

ともあれ、そんな世界を私は見ている。

美しき世界。

私がそう言っている世界。

その世界は文字通り、ただひたすらに美しい。

「こんな世界だよ」

「そうか。美しき世界か……何としても見たいな」

「ダメだよ」

「えっ!？」

「見たいと望んで見れる世界じゃないよ。勿論、見たいと思わないと見れないと思うけど」

「あー、さっきの話ね。色眼鏡。だから、まずは」

「廻子を知れ、と」

「そーゆーこと」

相互了解 100 への道はまだまだ。

でも、少しでいい。少しづつでいい。

だから、がんばろう。

というわけで、

「寝ましょう」

「そうだな」

おやすみなさい。

手はつないだままでいいよね。

.....

.....

.....

...

目が覚める。

朝。

結構早い時間。

左手の感触が変。

お兄ちゃん、もう起きたのかな。

左手にはお兄ちゃんの手の下代わりに、服の袖が握らされていた。

ふふっ。

なんだか笑ってしまう。

布団から出る。

影が見えた。

お兄ちゃんは露天風呂にいるらしい。

私も入ろう。

ストレッチして……っと。

ちゃぼん。

「おはよう。お兄ちゃん」

「ああ、おはよう。廻子」

反対側を向いているので、顔は合わない。

でも、なんかいいじゃん。こういうの。

「朝、だね」

「早朝だな。朝って言ってもいいけど、ちょっと早すぎる」

「ふふっ、そうだね」

お湯は昨日よりぬるめな気がする。



「太陽が出てきて間もないっていうカンジだな」  
「これから頑張って昇っていこう。みたいな」  
「廻子の美しい世界では、どんな風に見えるんだ？ 太陽？」  
「普通に……」  
「……ははっ、そうか」  
「天球表面に張り付いてるイメージ」  
「ほほう。宇宙に浮かぶ球体じゃないのね」  
「そりゃあ。お兄ちゃんは今ここで見える太陽が球に見えるの？」  
「まったく見えん」  
「じゃあ、そういうことなんだよ」  
「そういうことか、わはは」  
本当に分かったのかこの人。  
「夜空の星も同じ感じ？」  
「うん。張り付いてる。どうやって動いているかはわからないけど」  
「そりゃそうだな」  
「でも、どうやってとか、そんなことはどうでもいいんだよ」  
「美しいから……」  
「そうか……」  
はふう。  
温泉。気持ちいいなあ。  
「そういや、俺はどう見えるんだ。超イケメンか？」  
「あー……」  
「そうか、なんとなくわかった……」  
「いやあ、そもそも見えないんだよね」  
「まじか。あまりに汚いから存在抹消されたみたいだな」  
「そんなんじゃないと思うけど……」  
「じゃあなんでだろう……」  
「わかんない」  
「でも、見えないのが自然だった」  
「ええええええ」  
「……ごめん」  
「悲しいなあ。実に悲しいなあ」  
「うう……」  
「そうか……見えないんだな……」  
「うん……、人自体が見えない」  
「そうか。何でだろうなあ」

「わかんない……」

流石にお兄ちゃんが見えないのは悲しい。

そればかりはどうでもいいと流せない。

「まあ、しょうがないんじゃないの」

「えっ!？」

「いつか見えるようになるかも知れんし、とりあえず今の世界では見えるんだろ」

「今はそれでいいんだよ!」

嬉しいなあ。

そう言ってくれて、ありがと。

「つーわけで、今は俺を見ろ!」

ジャバっと、立ち上がるお兄ちゃん。

私も立ち上がり、向かい合う。

見よう。

今は。

今、この世界で。

「……!？」

見た。

素っ裸のお兄ちゃん。

見られた。

素っ裸の私。

しまった。

ついうっかり普通にお風呂に入る感じで脱いじゃった。

「……!？」

全裸で二人、向き合う。

折角だから見ておこう。

なーんて。

「「……!？」」

「「キャーーーーー」」

二人の声。響き渡る。

行きはバス。帰りは電車。

帰りの電車内。

うん。

朝食は二人共顔真っ赤だった。  
まともに顔も見れないし、悶々とした雰囲気。  
そのままチェックアウト。  
初心すぎるぞ私とお兄ちゃん。  
でも、見ちゃったんだから。  
仕方ない仕方ない。  
記憶に残しておこう。  
記憶をちらり。  
カアアア……。  
下を向く。  
やばい。  
今の私。  
真っ赤。  
まあ、でも。覚えておいて損はないからね。  
むしろ得か？ 得なのか？  
得だと思っちゃうような思考回路の持ち主だったのか廻子は！  
お兄ちゃんの方を向く。  
下を向いていた。  
私と同じ気持ちなんだろう。  
あれからほとんど話してないからな。  
なんか話そう。  
「……」  
なんだよう。  
なんで裸程度見ただけでこんなことになっちゃうんだよ……。  
裸程度ってなんだよ！  
裸は大事だからね。  
ね！  
「……今日はお日柄もよく……」  
なんかお兄ちゃんが言ってる。  
返さなきゃ。  
「えっと、まあ、そうですね」  
「そうです……」  
「……そう」  
「僧？」  
「僧！」  
何をしているんだ私達は……。

私はともかくお兄ちゃんとかただのセクハラ野郎のくせに肝心なときチキン過ぎだろ。

私はともかく！

まあ、チキンなんですけどね、私。

……純粋と言って下さい……。

「……」

ダメだ。

寝よう。

寝れなくてもお兄ちゃんの肩にさり気なく寄り添って関係を元に戻そう。

うん。

寝れないね。

寝れない。

電車の中で昼食。

もぐもぐ。

無言もぐもぐ。

「まあ、やっちゃまったもんは仕方ない。忘れようぜ」

忘れたくないから困っているんだよなあ。

「……うう……」

ぼん。

頭にお兄ちゃんの手。

「廻子、笑顔」

撫でられる。

「へへへっ」

笑顔。

お兄ちゃんも笑顔。

ま、そうだよな。

仕方ないから、仕方ないよ……ね？

「結局、温泉に入っただけだったよな」

「思い出してみたらそうだね」

「でも、まあ、いいか。楽しかったし」

「私も楽しかったよ。すごく」

「……それで……」

「どうした、廻子？」

「今、何%？」

「85ぐらいかなー」

あんまり増えなかった。

「……そっか」

でも、まあ、いっか。

ちょっとづつ。ゆっくと。

でも。

99.99…を目指して。

電車、乗り換え。

ここからはあと少し……らしい。

私はあまり電車乗らないからわからないけど。

こっちの電車は座席が空いてなかった。

座れない。

だから二人で並んで立っている。

外を見て。

特に何を思うわけでもなく、

二人。手を繋いで、ね。

流れていく風景。

そして黒。

あれ？

もう夜？

違う。

そんな時間じゃない。

ということは……。

しまった！

この電車もしかして……………。

「……っ！」

体が傾くのが分かる。

目の前が真っ暗になる。

私は、意識を失った。

はろはろー。ヒカルです。SAIHIKA は多分過去最高ページです。みんな頑張りました。続き物ばかりじゃねーかと思うので、短編を書こうとも思うのですが……、どうなんでしょうね。ただでさえ天球少女はページ数がかかりますから、ね。天球少女も次回から後半戦です。といいつつも、すでに次回作のプロジェクトは始動しているのです！ ヒカルでした。

こんばんはこんにちば鵜和です、この間アウトドア的な服…ウインドブレーカーとか、あと色々がいっぱい置いてあるお店にふらっと立ち寄って見たんですが目が幸せでした。あの色が良いんですよね、山の緑色とか砂色の中で燦然と輝く朱色とかね。それと同時に色を扱う難しさを感じます。まだまだです。もっと好きな色を置きたい、頑張ります。



はい、どうもこんにちばこんばんはおはようございますT.Kですー。あとがきに書きたいことを書いたので語ることはあまりありません。強いて言えば夏休みがもうすぐ終わりそうで、引きこもれなくなるので悲しいです。

ああっ、山賊が死んだー！ マウスです。今回は（モスクワ時刻）二十二時半に原稿を提出しました。間に合ってますとも、ここがモスクワだったらね。割と簡単に人死にが出ましたがそんなものです。ファンタジー世界は弱肉強食です。